第11回
むのたけじ反戦塾
手元資料

憲法9条こそが人類に希望をもたらす
〈むのたけじさん最後の演説要旨〉

私はジャーナリストとして、戦争を国内でも海外でも経験した。相手を殺さなければ、こちらが死んでしまう。
本能に導かれるように道徳観が崩れる。だから戦争があると、女性に乱暴したりものを盗んだり、証拠をけすために火をつけたりする。これが戦場で戦う兵士の姿だ。
こういう戦争によって社会の正義が実現できるか。人間の幸福は実現できるか。
戦争はけして許されない。それを私たち古い世代は許してしまった。新聞の仕事に携わって真実を国民に伝えて、道を正すべき人間が何百人いても何もできなかった。戦争を始めてしまったら止めようがない。

ぶざまな戦争をやって残ったのが憲法九条。
九条こそが人類に希望をもたらすと受け止めた。そして七十年間、国民の誰も戦死させず、国民の誰も戦死させなかった。これが古い世代にできた精いっぱいのことだ。道は間違っていない。

国連に加盟している何処のクニの憲法にも憲法九条と同じ条文はない。日本だけが故事のようにあの文章を掲げている。
必ず実現する。この会場の光景をご覧なさい。若いエネルギーが燃え上がっている。至る所に女性たちが立ち上がっている。新しい歴史が大地から動き始めた。
戦争を殺さなければ、現代の人類は死ぬ資格がない。
この覚悟をもってとことん頑張りましょう。

第11回 むのたけじ反戦塾

日時：2025年2月24日（月・休）
13:30～16:30
会場：文京区民センター３C会議室　（30名）
（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）

プログラム（予定）：

❶　参考上映『東京外国語大学対談シリーズ
100歳ジャーナリストむのたけじさん』
（77分：13：35～14：50）
❷　フリートーク（90分：15:00～16:30）
●これまでの話からこれからの問題を出し合う
●話し合いの成果の発信に向けて

【この手元資料の内容】

資料❶　第11回反戦塾に向けて　武野大策　P.2
資料❷　参考上映「100歳ジャーナリスト むのたけじさん」　P.3～4
資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　P.5～16
資料❹　第4回から第6回「むのたけじ反戦塾」のまとめ）　P.17～19
資料❺　これまでの「むのたけじ反戦塾」（上映の記録）　P.19

資料❶　第11回反戦塾に向けて　武野大策

第11回反戦塾に向けて
――「いまを戦前にさせない」ために

武野大策

2025年が明けました。
今年は、戦後80年という区切りの年になります。さらに、そのような区切りというだけでなく、今後の世界の動きをみると、人類が生存できるかの分水嶺になる年のように感じられます。むのたけじの「希望は絶望のど真ん中に」で、述べられている「人類の余命は40億年か、40年か」を決める年になるかもしれない。そのこともあって、むのたけじ反戦塾はこれまで話し合ってきたことを再度まとめて出したいということになるわけです。

2022年２月に始まったロシアのウクライナ侵略は続いている。23年10月に始まったイスラエルのパレスチナのガザへの侵略は虐殺行為が続いましたが、一応停戦の合意がなされました。しかし、最近では、トランプ合衆国大統領がデンマーク自治領のグリーンランドを獲得の話をしたりして、また、西側がよくいうのは中国の海洋進出もあります。いわゆる軍事大国と呼ばれるところの横暴がめだちます。こういう状況で、日本政府も厳しい財政事情の中で軍事予算を多くして軍備を強化しています。しかも、世論調査を見ると、その方針を支持する人が多い。だから、第二次世界大戦前のようだといわれるのだと思います。
しかし、それで良いのだろうか。第二次世界大戦では、研究者により幅がありますが、広く流布しているものは5000万人から8000万人の死者がいたとされます。第一次世界大戦の戦死者の推定が900万人から1500万人以上と言われていますから、第一次から５倍以上です。もし核爆弾が多数ある現在、第三次世界大戦が起きたら、どれだけの被害が出るか計り知れません。しかも、被害が非戦闘員の市民が負うことになることになるのです。
このこと一つとっても、軍備を整えて備えるという選択肢はなく、いかに戦争を起こさないようにする努力が必要であると考えます。加えて、日本は資源のない国です。食料自給率も低いです。貿易が止まることがあれば生存できない国です。このことは世界的で見てもほぼ同じで、グローバル経済が広まった現在では戦争により自由貿易が成り立たなくなると、経済が成り立たないのは明らかなことです。そのように考えると、憲法９条を守る人たちを頭の中に花でも咲いていそうなほど能天気なことをいう「お花畑論者」といわれるが、私はやみくもに武力を増強するほうがそれにあてはまるのではと思います。

それでは武力に頼らないで国を守るとは、何があるか。そうした議論をするのも「むのたけじ反戦塾」です。もちろん、日本は憲法９条を守っていれば、それで良いというものではありません。平和を実現するには多くの努力が必要です。一般でも言われることはまず「外交」です。国家間の紛争を裁く国際機関、今は国際連合に代表されるものだと思いますが、ここに頑張ってもらうのもあります。また、我々も日頃から他国の理解を深めて、いわば民間外交のようなこともあると思います。国際情勢の変化に常に目を光らせてそれを世の中に知らせるジャーナリズムの仕事も役立ちます。さらに、戦争などは経済の落ち込みなどから起ころことが多いので、経済を安定化させるといったこともあると思います。そして、最も大事なのは、国民が平和を愛することです。そのことを声高々に発言することなど、いまの社会体制では平和を維持することは大変な努力が必要です。

むのたけじは、もちろんこうした平和を維持するための努力は大切ですが、社会体制を工夫して、黙っていても平和である「戦争のいらぬ　やれぬ世へ」を作れないかと考えていました。戦争が農耕創始で富が蓄えられるようになり、国家ができてからするようになってから起きているから、そうした社会は可能であると考えていました。しかし、現実にどのようにすればそれを実現できるかというような具体的方策を提示することがありませんでした。もちろん、今私たちは石器時代や縄文時代に戻ることはできません。新たな体制を作っていくことが求められると思います。
そこで、私たちが考えていかねばなりませんが、これまでも戦争にならないようにするためのたくさん試みがありました。代表的なものは、第一次世界大戦後、その反省のもとに国際連盟が作られましたが、その役割を果たせませんでした。第２次世界大戦には国際連合が作られましたが、これもまた、現在起きていることに十分対応できていません。こうしたことに関して、むのたけじは日本語の訳語が国際連盟、国際連合の体質をよく表していると言っていました。国際の「際（さい）」は物と物とが接するところという意味ですから、これらの組織が行なっていることは国と国をすり合わせることばかりで、中身に入っていかないから、物事を解決できないと言っておりました。
大きな組織を作ったりしても思うようにいかないものです。さらに国のあり方をお大幅に変更するといった大胆な変革をしなければ実現できないように考えるけど、案外簡単なことでも大切なような気がする。この反戦塾でも何回も取り上げていますが、むのたけじが2016年の有明防災公園の憲法集会で指摘したことです。第２次世界大戦で日本は無惨な敗戦を経験して、残ったものが憲法９条戦争放棄です。この憲法９条を、戦後日本の精神的支柱にして戦後復興を成し遂げ、しかも戦争に直接加担をせずにこられたことを強調しています。こうした結果、事故や傭兵で行った人などを除くと、戦後70年間以上国民の誰も戦死させず、他国民の誰をも戦死させなかったと強調した。
私はこうしたことが成し遂げられたことは、もちろん米国の核の傘の中にあるということがあるが、憲法に戦争放棄ということを書いて、それを国民が大事にしてきた要素が大きいと思う。それなのに、安倍政権は集団的自衛権容認を閣議決定し、2016年それを運用する決まりを定めた安保法制を決めている。これにより、憲法９条第１項にある「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」が無力化され、日本の安全保障環境は大きく変えられたのです。
この変更については、多くの国民が国会を囲んで反対運動をし、法案が成立後、全国規模での安保法制違憲訴訟が行われ司法の判断がなされました。その判断は実際に被害を受けていないから判断ができないということで棄却というもので、私たちから見れば国家の重大な方針変更に、司法が判断しなかったということになります。今後、この変更によって、軍事費が国家予算の中で増大することも踏まえて、これまで長いこと維持してきた政策変更が必要であったかを見ていくことです。そして、日本において平和主義が外交の中心に据え、一生懸命ものづくりして経済発展をさせた時期があったことは少なくとも次の世代に伝えなければならないことです。
さらに、こうした変更をする要因は、確かに尖閣諸島に中国の漁船や海警局の船が来たということがあるけれど、アメリカの中国封じ込め政策の一翼を担うことにあることは認識するべきことです。これはアメリカのトランプ大統領の就任式を見ながら書いているが、アメリカの意向に沿わないと、すぐ高い関税をかけるというのは世界から嫌われるだろう。翌日の22日の新聞には「トランプ米政権、中国への対抗鮮明に　発足直後に日米豪印外相会合」という見出しが踊っている。本当に、戦前にしたくないですね。（2025年1月22日）

資料❷　参考上映「100歳ジャーナリスト むのたけじさん」（１）

参考上映『東京外国語大学対談シリーズ
100歳ジャーナリスト むのたけじさん』
（77分：13：35～14：50）

東京外国語大学長対談シリーズ：
100歳ジャーナリストむのたけじさん
https://www.youtube.com/watch?v=xUFPAL4m9_E
2015/10/20
　立石博高東京外国語大学長と100歳のジャーナリストむのたけじ（武野武治）さんの対談の模様です。
　むのさんは、東京外国語大学の前身である東京外国語学校のスペイン語科を1936年に卒業され、報知新聞記者を経て、1940年朝日新聞社に入社されますが、敗戦を機に戦争責任を感じて退社。その後、地元の秋田県で1948年に週刊新聞『たいまつ』を創刊し、反戦の立場から言論活動を続け、執筆・講演等を通じて、100歳を迎えた現在もジャーナリストとして活躍しています。
　今回の対談では、むのさんの学生時代の記憶や今後本学へ期待することを伺いました。

［追悼］**むのたけじさん～本学での学びの記憶、いま伝えたいこと、未来へ**

2016年8月21日、本学卒業生で101歳ジャーナリストのむのたけじ（本名：武野武治）さんが逝去されました。
むのたけじさんは、1936年、本学前身の東京外国語学校スペイン語学科（文科）を卒業後、報知新聞社を経て朝日新聞社に入社しましたが、敗戦を機に戦争責任を感じて退社。その後、地元の秋田県で1948年に週刊新聞『たいまつ』を創刊し、反戦の立場から言論活動を続けていました。
昨年度10月に行われた立石学長との対談を機に、ホームカミングデイにおいて、80年越しに卒業証書を授与することもでき、80年前の東京外国語学校時代の記憶などもお伺いすることができました。
むのたけじさんを偲んで振り返ります。
むのたけじさんの来歴
80年越しの卒業証書授与
本学学生と語る：むのたけじさんインタビュー
[
対談] むのたけじさん×立石学長：学生時代の記憶、本学へ期待すること

むのたけじさんの来歴
むのたけじ（武野武治）
1915年 秋田県生まれ。1936年 東京外国語学校西語部文科卒業。報知新聞を経て朝日新聞社に入社。中国、東南アジア特派員となるも敗戦を機に太平洋戦争の戦意高揚に関与した責任を感じて退社。1948年秋田県で週刊新聞『たいまつ』を創刊、反戦の立場から言論活動をおこなう。1978年『たいまつ』を休刊。その後も旺盛な執筆・言論活動を続ける。戦中戦後の混乱期において卒業証書の授与がおこなわれなかった本学卒業生の一人として、2015年10月、学内にて卒業証書が手渡された。享年101歳。

80年越しの卒業証書授与

卒業する年の2月末に「2・26事件」が発生。当時皇居の堀のすぐ隣にあった東京外国語学校の周辺には兵隊がいて近づけなかったとのことです。

2015年10月31日に行われた東京外国語大学ホームカミングデイ、戦後70年企画：東京外国語学校・東京外事専門学校卒業証書授与式において、ようやく80年越しに卒業証書を授与することができました。卒業生代表挨拶で「軍国主義に個人が翻弄される惨めな時代だった」、「感謝と尊敬を母なる学校に捧げたい」と熱く語ってくださいました。
卒業者代表ご挨拶の様子はYouTube:TUFS Channelで動画でご覧いただけます。

いま伝えたいこと–外語大生へのメッセージ

―外語大、そして、むのさんの学生時代についてお聞かせください。
いまの毎日新聞社の近くに東京外国語学校[現・東京外国語大学]はあったんですね。そこは徳川時代の蕃書調所があったところで、歴史をさかのぼってみれば、「鎖国はしているけれど、外国のことは勉強しよう」と、外国人と実際に会ってみたり、また海外の資料を集めたりするような場所でした。
神田区[現・千代田区]にはいくつもの大学が集まっていて、地域全体がまるで「大学のデパート」とも言えるような場所でした。
いろいろな大学がそこにありましたが、外語学校の評判はよかったと思いますよ。「外語の学生は真面目だ、勉強家だ」とね。ただ、学生には貧乏人の子が多くて、世間的にもそういう評判だったと思います。建物は非常に粗末で、風が吹くと屋根が揺れるくらいでした。1学年が12か、13種類の外国語で構成されていて、一クラスが30人くらいだったと記憶しています。
私は1936年の卒業ですが、1920年代から30年代にかけて、日本の社会は非常に揺らいでいました。ヒューマニズム、デモクラシー、ソシアリズム、コミュニズムなど、政治や社会を変えるためのさまざまな動きが出てきた時期です。不安定な社会情勢に呼応するように、学生運動もありました。
卒業した1936年には軍がクーデターを起こした二・二六事件がありました。卒業試験の何日目だったか、まさにその2月26日に、軍隊が学校の入口前にも陣地を張っていたのです。卒業試験どころじゃない。軍人から「帰れ」と言われて、結局学校へ入れずに帰りました。そんなことが起きる時代でしたから、卒業式などもできなかったのでしょう。それで昨年、なんと卒業してから80年後ですが、学校へ呼ばれて学長から卒業証書をもらいました。外語大は、非常に時代の流れに揺さぶられたことがあったんですね。

参考上映「100歳ジャーナリスト むのたけじさん」（２）

―学生時代で楽しかったことはなんでしょうか。
おもしろかったのは語劇です。フランス語科ならフランス語でといった具合に、自分が所属する専攻語の劇をやるわけです。実際に上演するとなると費用もかかり、これは大変でした。でも、各国の大使やその家族なども観にくるものだから、外語学校でも語劇については大いに力を入れていたのだと思います。
私たちスペイン語科は四年生のとき、おかしなスペイン語劇、たしか、ビセンテ・ブラスコ・イバニェスの『血と砂』をやったような記憶があります。親友の江原君と私は「どうせうまくできないから端役でもやろう」なんて言って、私はお茶目な女性の役を演じました。
芝居が終わったら、おかしなことが起きましてね。スペインの大使館関係者の家族と思われる娘さんたちが5、6人やってきて、「この中には本物のスペインの女の子が隠れてる！」と言う。あの当時、学校には女子学生は一人もいなかったから、男子学生が女性の格好をするわけです。

衣装や化粧などは築地小劇場の人たちが手伝ってくれましたので、本当にそっくりだったのでしょう。それで、その娘さんの一人が「スペインの女の子だ」と言うんです。そこで私は服を脱いで、胸のふくらみを出すために使っていた綿を見せてあげた。それを見て、スペインの娘さんたちはキャッキャッと笑っていましたね。

―どうして、外語大に入り、ことばを学ぶようになったのでしょうか。
私は、中学入学当初、外国語がこわかったです。それでも、登校途中でアルファベットを暗記するなど、いろいろ工夫しながら、とにかく横文字に親しむことをしておりました。そしたら、二年になったときは、得意になっておりました。
それで、当時の日本は中国の進出で世界各国から非難されていましたが、外務省の態度はよろめいてみじめでした。それで、ここの分野で働こうとした気持ちがありました。
―異なることばを学ぶとは、どのようなことなのでしょうか。
外国語を身につける、外国語を正確に理解しようと努力する。そこから身に付いた能力はかならず役に立つと思います。自分が何のためにこの学校に入って、将来をどうするのかは人によって違いますから、個人で学びつつ、友達などと経験を語り合えばいろんな可能性が出てくるでしょう。
私自身は語学を専門として活かす職業に就いたわけではないですが、この学校を卒業してジャーナリズムの道へ入ったことはよかったと思っています。それを示す一つの話をします。
ある授業で、スペイン人の先生から呼び出しを受けたことがあります。なんだろうと思っていると、先生から「日本人はこんな馬鹿な考え方をするのか！」と怒鳴られたのです。作文の授業で、私は「半信半疑」というような内容をスペイン語で書いたのですが、先生はそれを読んでとても怒っていました。先生によれば、「信じることとは疑わないことであり、半分疑うなどというのはありえない。それはすべて疑っていることではないか。どうして日本人はそんないいかげんなことを言うのか」ということをおっしゃった。これには本当にショックを受けましたね。
異なる文化やことばを学ぶことによって、日本人のもっているいいかげんさ、あるいはあいまいさについて、自分の考え方を抉えぐられたと感じました。ショックはありましたが、外国語を学ぶこととは、人間形成のうえで役に立つということを知りました。ものの見方や生き方を考えるうえでも、外語学校で学ぶことができてよかったと思っています。
―印象に残ったり、むのさんに影響を与えた本はなんでしょうか。
世の中を変える運動に関する本ですね。むかしは神保町にある古本屋をよくまわっていました。古本屋街に行けばいい本が安く見つかりましたから。当時は貧乏で教科書以外の本など買えませんでしたが、社会主義や共産主義、発売禁止になった本が全部そこに並んでいて、そうした本に大きな影響を受けたと思っています。

作家としてとくに影響を受けたのは文学者の魯迅です。魯迅は、孔子の考え方、儒教の価値観に対して、1人で反対して、1人で闘っていました。魯迅は人間を本気で受け止めて、ごまかさない。私は魯迅さんとまったく友達ですよ。『魯迅選集』は全一三巻で、よいのが出ていますから、手にとってみるといいでしょう。
―いま、外語大にどのようなことを期待していらっしゃいますか。
いま国際連合に加盟している国家は約200ですが、国家の枠を越えて、世界全体、人類全体という立場からの働きは、さっぱり進歩しませんね。国家エゴイズムを乗り越えるために、ことばの働きや文化の交流について何が必要か、こういう分野について外語大は積極的な働きを開拓するべきではないか。
もう1つは、私が重視する少数民族と呼ばれる集団の存在のことです。国家には、多数を占める民族のほかに、1グループの人数が数十万人から数千万人の規模で存在している民族がいることが多いです。このような民族はロシアには約100の集団、アメリカと中国には、おのおの50のグループと記憶しています。
これらのグループは、多数を占める民族と異なる、人種、言語、宗教をもっているため、差別的、不平等な扱いを受けている場合が多いです。そうした扱いに対する反発が世界の混乱を高めているようにみえます。だから、人類全体の共存には、少数民族との相互理解と協力へ導くことがもっとも大切ではありませんか。外語大は、ことばの研究を土台にしながら、さまざまなグループの文化活動、生活実態を明らかにする努力をすでになさっていると聞いていますが、もっと力を注いでいただきたいと思います。こうした問題について教師と学生が存分に語り合っていただききたい。
―最後に、学生へのメッセージを聞かせてください。
学生ら社会人への歩みは、人生の大事な結び目ですね。私の経験を言えば、この時期はとくに中途半端な態度がいけないと思います。自分を駄目にするだけでなく、まわりの人々にも迷惑を及ぼすことになります。これをやろうと決めたら、まっしぐらに命がけでがんばりとおす態度が大事です。
私はよく「諦めることを諦めなさい」と言っています。そうすれば、きっと道は開かれますよ。
もう1つ、人間には一生に何度かはいい気分なるときがあります。そんなとき、自分を甘やかしてうぬぼれたら駄目ですよ。他人を馬鹿にするような人間がいちばん馬鹿だと私は思っていますから。
地球上には80億以上の人間がいる。でも自分は1人しかいない。あなたはあなた1人です。学生のみなさんにはご自分を丁寧に、大切にしながらも自分を見つめて、死に物狂いで生きていってもらいたい。これが私の願いです。
[外語大生に薦める本]『魯迅文集』全6巻、竹内好訳、ちくま文庫、1991年（『魯迅選集』全13巻[岩波書店]は現在品切れ）
（東京外語大学ホームページ　**[追悼] むのたけじさん～本学での学びの記憶、いま伝えたいこと、未来へ　転載させていただきました。**
https://www.tufs.ac.jp/tufstoday/topics/alumni/16082201.html）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（１）

※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして､次の回の手元資料に掲載させていただいております。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは**「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」**という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。
　また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。
　しかしながら、録音したものから書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いながら文字に起こしているところ（？）や（＊＊＊）で表示）があります。
　ご自分の発言と思われるところで，間違いがありましたら、お知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。

第10回　むのたけじ反戦塾　　2024年11月16日

●司会：
　きょうは、2022年12月に第1回目を始めてからですね、ちょうど10回目の会合になるんですけれども、これまで 2ヶ月に一度、あるいは3ヶ月に一度、この会を重ねてきました。
　最初の頃は、それぞれ考えていることを、出し合ってっていう形だったんですけれども、だんだん回を重ねるごとに、私たちがやろうとしていたことと言いますか、 考えようとしていたことが、おかげ様で皆さんの考えに一致するところが多くなっていったように思います。
　そこで手元資料とか、案内チラシにも書いたんですけど、この10回目を一区切りにして、今までの出た意見と言いますか、そういったのを元々が反戦のっていうことでどうやったらいいのか、自分だったらどういう風に考えてったらいいのか、どういう風に行動してったらいいのかっていうことについても、まとめと言いますか作ってそれをもうちょっとこう広げていくって言いますか、声を出していくという形にしていきたいと思いまして、この10回目が1つの区切りと考えました。
　この後のことについてはまた、話し合いの中でさせていただきたいと思うんですけれども、できるだけ自分たちで今までこう話し合ってきたことをもとに、それを生かしてっていうような形をとっていきたいと思いますので、またご意見を是非お聞かせください。
　今日ははじめにむのたけじさんが2016年ですか、亡くなる前だったと思うんですけど、 2015年に中野ゼロホールの方でお話をした講演と言いますか、それを最初に見ていただいて、戦争とジャーナリズムというテーマなんですけれども、その後またいつもと同じようなと言いますか、皆さんの反戦に対する考え方、そういったことを出し合うような形で、討議を進めていきたいと思います。

（「むのたけじ 緊急講演会『戦争を考える』戦争とジャーナリズム」講演動画上映52分）

●M.T.：今の動画は何年ですか？
●武野：最後の方だと思う、2015年。
●M.T.：2015年、ほぼ10年前。
●武野：ええ。ちょっと誤解を招くとのが、最後の方で話した「敬い合う」です、ちょっと偏った考え方でないかと思っています。難しい。
ただ、ここで言おうとすることを一言で言うと多分、平和運動の必要性っての、要するに戦争がない状態でも、国と国とは仲良く出来るってことを認識するっていう、そういうようなことだっていうのは、とても大事なことなんじゃないかなと思います。
●＊＊：男と女について強調されてましたね。

●武野：
　あれはいつも枕詞のように「うちの息子にこの話をすると、いつも怒られるけど」って先に言ってたんですけど、「敬う」は大好きな言葉なんです。ま、確かにね、愛と敬うって感覚、ちょっと違った考え方じゃないかなって気はしてるんですけど、難しい。

●司会：
話し合いの方を始めたいと思います。
きょうは、手元資料にも書いてあるんですけど、一つは2022年の12月から 1回目として始めたんですけれども、10回目っていうことで区切りとして、それをまとめる形で、これからの会をやっていきたいと思いまして、そういう進め方について皆さんのご意見を伺いたいと思っています。
　それからずっと私たちは簡単に、きょうもし初めての方がいらっしゃったら説明しようと思ってメモを書いてきたんですけど、ちょっとなくなくなっちゃって…。
　もともとが今戦争の準備って言いますか、そういったものがこう進んでいる中で、あるいはそれは2015年の安保法制以来なのかもしれませんけれども、皆さん、それに気がついている方は「何とかしなきゃいけないな」と思いながら、どう動いていいのかわからないという風な、私は「憲法を考える映画の会」っていうのを、2014年からやってるんですけれども その中で出た意見っていうのもそういった意見が多くてですね、手がかりとして私は2016年ですか、こないだ 前回 ちょっと見ていただいたんですけども 有明でのむのたけじさんのアピールと言いますか、発言を聞いて、それを1つの手がかりということで、あの憲法であるとか、民主主義であることですか、あるいは戦争を止めるためのどういうことがあるのか っていう話をされていたかと思うんですけれども、それとともにむのたけじさんが晩年、若い人たちも含めてですね、「戦争をしてはいけない」「戦争はいらん」「 戦争をさせない」っていう風なことで、いろんな発言があるってことをしてですね、それをもとに、みんなで「どういう風にしてったらいいんだろうか」ってことを考えていこうというところで 武野大策さんと一緒に、この会を始めました。で、会の始めはそれぞれ皆さん、自分の考えていることっていうのを自由に出し合っていただいてですね、話し合っていただいてということで進めたんですけど、ほとんど毎回一通りお話がされるとだいたい時間になってしまうという形であまりこうなんか話し合いで活発にっていうことがうまくできなかったんですが、でもやはりそうした最初はどちらかっていうと「こういうことを聞いた」とか「こういう活動をしている人がいる」とかそういったことを 情報として聞いて、「なるほどな」と思ったことを出してもらって、それを出し合うって言うんでしょうか、意見を出すってことよりも 出し合ってですね、自分たちが考えていくと、やはり結局は「みんなでなんかしましょう」っていうのもあるんですけれども、一人一人が もっと考えていくことが大切なんじゃないかっていうことで この会を続けてきました。
　で 、だんだんそのことに皆さん、参加されていただいた皆さんもそういう情報を共有するっていうことから、その情報って言いますか、「何をやっていかなければいけないか」っていう風な一番基本にやることに話がですね結びついて、 前回なんかもこの手元資料に前回の記録を、こうあのちょっと繋がっていたいと言っていただいたんですけれどもかなりそういった点について、みんなやはり同じ気持ちでいるんだなとか、それをこう「何とかしなきゃいけない」と思っているんだなっていうことをすごくまとまってきたと言いますか、感じが伝わってきてですね、武野大策さんとも話をして、10回目で一区切りにして、これを今まで発言されてきたことを、あの、ランダムに発言してるんですけれども、いくつかの話のテーマみたいなものあるんでそれをちょっとこう整理してまとめていくっていう風なことでもともとが毎回必ずこう参加してくださいっていうのは、かなり難しいことだと思うんで、参加しなくてもこういう話がされているっていうことをですね。（次ページへ）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（２）

記録していく、そのことによって参加してない方もだいたいの話の内容がわかって、また次の話の時にはこういったことを話していこうみたいな気持ちになったことを考えたんですけれど、やっぱり記録していくっていうことはすごく大切なことでですね、皆さんの意見もこう意見として、もちろん それを聞いて「ああなるほどな」と思うんですけれども、やっぱりそれが考える、いろいろ 自分で考えることも、やっぱり落ち着いてるって言いますか、記録をもとに記録したものをもとに読み返してみたいとか、今回も 2年前のものから見てみたんですけど、はじめて、「ああ、そういうことを言ってたんだな」って分かってですね、そういったものをまとめてですね、この2年間の間にどういう話があったかっていうことをちょっと整理してみたいなと思いました。

で それと、やっぱりそれに即してですね、この間、土田さんからお話いただいたんですけれども、来年は2025年ということで、いろんな意味で節目の年になるんですね。まあ戦後80年、昭和から考えると100年目ですか、それともう一つ私たちが、反戦ということを考える時に考えなきゃいけない2015年、安保法制の年ですね、以来、この10年間にどんなことがどんどん「戦争の準備」っていうのが 具体的に進んでいる、ところがそれに対しての関心っていうのはどんどん薄れて行ってんじゃないかとか、そういったことでまあ、たまたまですけれども、毎年さんの亡くなった 8月っていうのが何周忌っていうことで、ちょっと大きめにということでやってきたんですけれども、それと合わせて来年の2025年の8月をちょうど目標にですね、今までの10回のこう話し合ってきたことをまとめて、他の人、参加してない人にも何らかのメッセージを伝えられるようなですね、自分たちはこんな風に考えてきた、私たちの考えはこうです、安全に対しての考え方はこうですっていうものを 出していく。そのためにまとめの時間とですね整理の時間とですね、それをこう 何らかの形で発信できるような形にしていくっていうことをやってみて、その来年の8月あたりにはそれをこう発表できると言いますか、何らかの会を開いていくっていうことで区切りとしたいなと思いました。

もちろんその後もいろんな形で続けていくとか、あるいは違った形で何らかの形を作っていくとか、あるいはそういった意見を出し合う場みたいなものが、あの集まって話をするっていうだけでなくて、日常的にできるような場を作るとかいろんな考え方を、それもこの11回目、12回目の話の中でまた進めていくというようなことができないだろうかと考えています。

きょうは、そういった意味で今までの集まりと同じように日本が、ていうか私たちの国がこう非常に戦争の危険っていうのがやっぱり迫っているって、前回まで自衛隊のことである とか、日米安保のことであるとか、あるいはメディアの問題であるとかいろんな課題っていうのを含めて、あるいは私たち自身がこうすごくそういったことについて話す、話し合うってことをしなくなっているとか、若い人たちにどういう風に伝えたらいいのかっていうところでなかなか答えが出せないでいるとか、そういったことをこう、いろんな課題や問題、あるいは テーマがあるかと思うんですけれども、そういったものをまた継続して話をしていっていただきたいなと思いまして、今日のお話はそういった線、出していきたいと思います。

合わせてやはりこの前回やったのは 8月の17日なんですけれどもそれから3ヶ月の中で随分、政治的なというか 社会的な状況がどんどん変わってきたっていうまああの内閣が変わるのを始め、選挙があったり、一番やっぱりアメリカの大統領選の結果とかですね、そういったものが今まで話し合ってきた中で私自身もどう考えていったらいいのかわからないっていうところがあってですね、それを今まで話し合ってきたものの中から、何かもし皆さんのご意見とかですね、あるいはこんなことを知ってるかみたいなことも含めてなんですけれども、交えてお話いただければなと思っています。これは私がちょっとよくわかんないでいるんで皆さんにお願いしたいことなんですけど。

●武野：

私自身、生物学をずっとやっていた関係がありまして、今回が最後と言うこともあって、その関連の話しします。ダーウィンの進化論なんですが、要するに戦争を肯定するのはないとされるが、本来の意味と違う理解が広まっています。進化論で基本的には戦うことによって戦いに勝ったものが、優れてると誤解されています。この考えは生物学的には間違っているのですが、優生学っていう形で広まりました。障害者の問題とかそういうのを引き起こしました。一方、今生物、要するに生きもの理解が、かつてなく非常に進んでいて、生物の中で行われている基本的になことはほぼわかっているのに関わらず、結局人間とかはその理解に沿った形で、すなわち生物の本性に従って生きていくことが非常にいいはずなのに、それがなされていないというのが 私自身の元々感じていることです。

たとえば、こういうような戦争とかなんとかっていうものは、生物本来生き方をすればあり得ない話です。 要するに勝ったものが優れているってことはけしてないし、食物連鎖で互いに食べ合わねば生存できないという宿命で、食べ合うことがあるのですが、それ以外では殺し合わないというのが原則です。なぜなら、人間とかこういうような生物が生きられるのは他の生物も生きていられるからで、またこれだけ 繁栄してきたっていうのは、生物の多様性って、いろんなもの、いろんな種類のものがあるから環境変化にも耐えられこれだけ生き延びられてきたんだとなっています、１種類単体だったら、環境変化についていけず完全にだめで、 たぶん生物っていうのはなかっただろう。 生物は多様性を大事にしうるから、従って違うもの、すなわち他人を大事にしなければなりません。冒頭に話していた父が言った「敬う」ことにつながると思います。

私は生物の本来の姿に沿っていくということをもうちょっと詰めていければと思っています。

それでですね、まあちょっとあの花崎さんの方からの説明があって、少し 補足させていただきます。いつもは私が話したことを花崎さんが補足する形になることが多いのですが、今回は多分花崎さんの方で補足してくれると思います。基本的にはこの会のですね、皆さんの発言っていうのはなかなかちっちゃい文字で書いてて振り返ることがないと思うんですけど、それぞれ個人の話って非常に面白い話がたくさんあるんです。

それをですね、やっぱりそのまま残してあげたいというのが、私と花崎さんの間の中での共通認識なんです。それで非常にちょっと大変だっていうこともあるんですけれども、これを1回から10回までの発言集を作りたいっていう結構大変な作業をしたいと考えています。それでまあ一人一人の個人の話が残るように作りたいということです。まあただこれは一般書としては多分売ることができないように考えています。この中で簡易的な印刷という形で、これをやってですね、のこしたいということです。

そのあとできたら、一般書としても出したいと考えています。基本的には（この手元資料の） 3ページ目のと本の構想もところに書いてあります。ただ、なかなか今、本を出すの大変なんで、出せるかっていうのは非常に厳しいところなんですけども、要するに 安倍政権が集団的自衛権の容認っていうことをして、日本が戦争ができる国になった前提で、多くの人がどうするかを考えてもらうためにもそれが非常に大きいわけです。これまでのことを振り返ってみれば、安保法制反対運動ってのは2015年ぐらいに非常に盛んに行われました。うちの父もあっちこっちに参加して、まあある意味では花だったわけです。そうした反対運動を無視して、政府は法案を通し、実際に今、沖縄であれ、それに沿った形で非常に軍備が進んでいる。それに対する反対運動がないというと怒られちゃうんだけども、反対運動が地域限定的で、それほど盛り上がってないということがあると思うんです。

で、だけどやっぱりちゃんとそれは反対運動しないといけないっていう気持ちがあるわけで、ただ反対ってというだけではダメなところが、この会の非常に大事なところです。一般的に反対っていうのはたくさんあります。 反対の中のどう言うことで反対なのかと話していくことがこの会のとても大事なことだと思うんです。

（次ページへつづく）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（３）

どう言う意味で、どういう平和を求めるかって言うことをきちっと提示すると言うことが我々の会の中でとても大事なことなんじゃないかなという思いが大事なんじゃないかという思いがあります。さらに、私たちはどういう社会を求めてるのかっていうようなことも示すことが大切じゃないかなと思うんです。そういうようなことを、やっぱりあの皆さんにアピールすることをしたいと、（手元資料の） 3ページ目にちょっと本の構想っていうことを書いたわけです。一言で言えば、安保法制以降の私たちの流れっていうものを明示するような本が必要なんじゃないかっていうことですね。

それで戦後の日本の平和運動っていうのを振り返ると、今のノーベル賞もらった核廃絶運動から多分始まっているんですね、核廃絶運動があって、 3発目の原爆が使わせないってうちの父が盛んに言っていたものだから、頭の中に残っているんですけど、3発どころじゃなくて、30000発作らせたんじゃないかという話をしているんですけど、それがありました。その後安保反対があって、9条の会が中心になっての運動がありました。それで核廃絶のノーベル賞の運動は、私はほとんど知らないし、安保、安保反対運動も分かりませんので、基本的には9条の問題から始めていくという形になるんだと思うんですね。

9条の話の大事なことは、さっき言ったように、うちの父が有明のところで話したように、要するに9条があることで、アメリカの支配下で、安保がある中でも日本独自の外交ができてきたんだと思うんです。あの2003年自衛隊がイラクとかなんとかに行く時に、戦闘に入らないとか、入らないとかが問題になり、議論もあったし、法律を作らねばならず、抵抗もできましたね。しかし今、それが全くダメになっている。要するに集団的自衛権 容認 っていう形のことがあって基本的には米軍と一緒に、米軍 だけでなくて あの イギリス軍とか他のいろんな国と一緒にと行動できるような形を今採っているわけです。 だからもともとの 9条の精神っていうのは、ほとんど潰されちゃったっていう形になっているのに、未だに9条、この前の5月の発布の日というのは、9条守れとデモやっていましたけれども、そういうような状態になっているんだっていうことをきちっと理解してもらうようなことが大事ではないかかと最初の項目にしました。

で、2番目は要するに私自身が感じていることは、日本の平和運動っていうのは世界に向かってないんですよね、 世界の状況をあまりとらえてなくて 単独でやっているって形、 今の世界の状況はどういうようなことなのかっていうことを疎かにしている感じがします。そこで 2番目に取り扱う。これは私もあんまり得意じゃないんで、皆さんにいろいろ教えていただかないといけないかもしれないんです。

そういうような形をやってですね、それと3番目は要するに反対運動は反省とか、振り返りが少ないんです。結局その後、安保反対運動では2つのことを中心的に、つまり、違憲訴訟とそれから野党共闘の運動が中心的なったと思うんです。違憲訴訟は私も見学させてもらったんです。けど、違憲訴訟は基本的には棄却という形で終わってですね。 そういうような棄却っていう形で終わって焦燥感を持っている。そしてその後、何かするかと思ったらまた市民運動しかないじゃないか っていうような話しか、なかったんです。

それから野党共闘の方は、今こそ 野党共闘やらなきゃいけないのに、結局野党がまとまれば 野党で政権を作れるのに、それができない。国民民主が単独行動して、そういうようなことで 両方ともあんまりパッとしない。まあそういうようなことで、私たちでなぜこういうようにいろいろ 運動してきたのに、実を結んで来なかったかっていうのをちょっと反省するような形になります。

それじゃ今度はどう言うような社会を目指す かって皆さんのこれからを今まで平和塾で話し合ったことを中心に、どういう社会を求めてるかっていうのを書いていけば良いと考えています。そういうような4つの柱にしたような形にして一般書として出せればなっていうような思いでいるところです。

●M.T：

前回と大きな情況が変わったというのは、やはり衆議院議員選挙で自民党が大負けしてしまったということだと思うんですね。それでずっと第2次安倍政権が始まってから、ずっと心配していたのは衆議院で憲法改悪、憲法変えるというですね それが発議されてしまうんじゃないかと、（発議に必要な）） 2/3があったんですね、安倍政権は。それがなかなか安倍政権としてもそこまで踏み切れなくて、結局集団的自衛権の行使の方向に踏み込んだり、その後を継いだ 岸田政権が攻撃能力の保持とかですね、そういうような方向に踏み込んではいたんですけれども、憲法改悪まではさすがにできなかった。今回の衆議院議員選挙で自民、公明、維新、国民民主足してもですね、280位かな、それで衆議院の3分の2が310議席ですから、足りないですね、ですからもう憲法改悪の発議は出来ない、と言う状況が生まれたんですね。できれば来年の参議院選挙でも、自民党、今3分の2持ってますので参議院議員、これもまた少数政党に落とし込む、と、そして来年7月が参議院選挙ですので、野党が何とか話し合いをして、自民党に小選挙区で勝てるようにしていけば、十分自民党、公明党に対抗する野党勢力ができるんじゃないかなというのは市民としてですね 、希望になって来たなと、言うように思いました。

それであの、世界戦争ってこと考えるとですね、ウクライナ戦争は、果たしてアメリカのトランプ大統領、来年の1月からスタートしますけれども、彼がウクライナ戦争に対してどう言う対応をとるんだろうかというのに注目しておくべきだと思います。ウクライナ戦争を停戦に持っていくのか、バイデンは止められませんでしたからね。トランプ大統領の動きを注目していくことと、中東でイランとイスラエルが本格的な戦争にならないかどうか、東アジアですと、おそらく台湾有事って言うのは起こらないですね、中国が台湾を攻めても何の利益もないので、台湾で動きがあると思えません。その代わり、北朝鮮がロシアと軍事条約を結んでウクライナに朝鮮軍がいま派遣されてるわけですよね。これが 逆に北朝鮮と韓国が一触即発の状態になるとロシアが北朝鮮の支援として軍を送ってくる可能性もあるんですね、今の大韓民国のユン大統領の支持率がですね、17% なんです。保守政権の大統領なんですけれども、支持率が17%で、5年の大統領の任期の今半分 なんですね。

残り2年半あるんですけど、 このままユン大統領がジリ貧になっていくのを、自分で認めてしまうのか、それとも人気稼ぎのために北朝鮮と戦争一歩手前の小規模な戦闘を起こすことがですね、外に敵を作れば、ユン大統領としては自分の人気回復に役立つので、いま、一番危ないのは、北朝鮮と大韓民国との間の戦闘がもしかしたら起きるかもしれない、それが東シナ海で起きうる大きな危険な情況なのではないかなと思います。

日本の市民運動としては、やはり、つまり台湾問題を口実にして、沖縄にミサイル部隊を 自衛隊のミサイル部隊を派遣して、鹿児島から沖縄、 与那国島までミサイル基地を作って ですね対抗するという自民党の政策は、もう意味がないと。そう言うことを市民運動の中で、平和運動としてはっきりと位置づけていくことがあるのではないかなあと。北朝鮮と大韓民国との関係を今後注目していく必要があるのかなあいと、私は前回の「反戦塾」から今日まで動きを見ていて感じたことでした。

S.H.

僕よくわからないんですけれども、北朝鮮と大韓民国との関係ですよね、これは日本にとって一番、危ないんじゃないかと、台湾より危ないんじゃないかと。で、先生にお聞きしたいんですけど、これこの、朝鮮半島の戦争って言うのはまだ終わってないですよね、ですからさっき先生おっしゃっていましたように、日本の平和運動って言うのは、国際の方に向いているか、向いてないかも含めてなんですけど、南の方ですとASEANというグループが出来てます。僕思うには、 北朝鮮、韓国、中国、ロシアも含めましてですね、そこに一つのコミュニティを作って、その朝鮮戦争を終わらせるような動きを、日本がイニシアチブをとって、やって行ければいいのかなあなんて思うんですけど、これどう言う動きなのかって言うのはね。

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録（４）

武野：
　多分それはやれば非常に一番平和運動では一番いいんだろうけれども、アメリカが それを許してくれません。
S.H.：
　そうですよね。だからトランプの話もありましたけれども、トランプは北朝鮮の金正恩、会ってますよね。だから僕はトランプが、「もしトラ」とか何とか言われましたけれども、もしかしたら、アメリカは、アメリカファーストですから、そこから手を引くんじゃないかって思ってるんですけれども。
武野：
それは期待してるんですけどね（笑）

S.A.：
その 北朝鮮、韓国、中国、日本、ロシア、アメリカですか、そう言うのは、北朝鮮の核問題が、いつ頃でしたかね、6カ国協議（2003年8月の第1回から2007年3月の第6回までいずれも中国の北京で計9次の会合が行なわれたが、それ以降開催されていない）って言うのがありましたよね。あの6カ国協議をやっていたときには、これを将来的には東アジアにおける集団安全保障機構的なものにできないかっていう考えが外務省の中なんかにもあってですね、そういう期待も、そういう風に出来たらいいんじゃないかと、 ただ実際にはアメリカと北朝鮮の関係が悪くなって6カ国協議がですよね、機能しなくなっちゃいましたよね。
　あと日本がリーダーシップをと言うところで言うと、日本は北朝鮮には全然相手にされてないので、日本が何言ったって全然進まないと思うんですよね。文在寅（ムン・ジェイン）も、今変わっちゃいましたけど、ムン・ジェインも結局アメリカと北朝鮮の関係がこじれてから全然相手にされてなくなったり、北朝鮮は結局、アメリカしか見ていないので、そういう意味で言うと アメリカがどう動くかによって、その6カ国協議的なものがまた出来るのか、出来ないのか、ということかな、と。
　で、さっきおっしゃったように、トランプが政権に復帰しますんで、多分トランプは、みなさんも一緒に（？）想像するンかもしれませんけど、金正恩は喜んでると思うんですよね 。これでもしかしたら またそのトップ同士の打開策が開けるかもしれない、で、しかも今は長距離弾道ミサイルを持っていて核も開発して、そういう意味で言えばアメリカに対しても十分、十分とは言えませんけど、 抑止力も持ってると。より対等な立場でやれるし、アメリカ側も態度を変えざるを得ないんじゃないかって金正恩は思ってんじゃないかなと思うし、アメリカ自身も多分今北朝鮮に対しては考え方が対応の仕方が変わってくるんじゃないかと思うんですよね。
 おっしゃるように、そのトランプ政権の誕生っていうのはこの米朝関係とか、あるいは北東アジアでの北朝鮮を中心に考えればですね、 変わってくる転機になるかなって私なんかも思うんです。もう1回戻るんですけど、日本がリーダーシップをと言うのは、結局北朝鮮相手にしてくれてないし、理由は多分二つ、一つはアメリカの言いなりだと、アメリカの子分でしかないから、日本と話したってアメリカが変わらなきゃ何も意味がないのが 一つあると思いますし、もう1つは拉致問題ですよね。北朝鮮が日本に期待するのはお金ですから、自分たちの経済に韓国が日韓協定の後にその経済協力、日本から受けたように、日本から自分ところの経済を発展させるための資金を得たいって言うのが北朝鮮にとって日本に期待する最大のものですけれども、日本政府の立場からすれば拉致問題解決しなきゃいけない、経済協力ができないということなんで、それは北朝鮮も分かってるでしょうから、そこはなかなか 繰り返しになっちゃいますが 日本がリーダーシップを取るっていうのは難しいんじゃないかなと思います。

K.S.：
戦争と平和について考える小さな規模の会、あと二つほど関わっているんですけど、そういうところでの会の議論とか、たいていですね、嘆き節で終わってしまうっていうかですねいつも、日本の外交はひどいとか、アメリカがどうしようもないとかですね、なんかこう否定的な議論にどんどん流れてって、それでなんか暗い感じで終わるというのが割と多いんですけど。
そういうのと違ってちょっとここの会に私なんか気に入ってるのはやっぱりその上で、それはそれとしてですね、要するに我々に何ができるのか っていうどういう方向がポジティブなね可能性としてあり得るかっていう問題意識っていうのが何かたえずこう空気として流れてるような共有されているっていう感じがあって、私もそういう方向で考えなきゃな と思っているんで、ちょっとまあいくつかですね、この時点でどんなことがこうね、具体的に我々がなしえることだろうかということちょっと考えてみたんです、昨日慌ててですけど。で、五つ、六つあるんですけど、それちょっと後でお話しするとして、その前にですね、ちょっとすいません、さっきの改憲論の問題に関連して私ちょっと最近すごく気になってる文章があって、コピーとってきましたから。
　ご覧になった方もいるかと思うんですけど、東京新聞のこれ、ひと月ほど前の蘭に長谷部恭男さん早稲田大学の教授ですね、例の安保法制の国会審議の中で、自民党の推薦で呼ばれて 賛成するかと思ったら反対しちゃったんで自民党が慌てたって言うそのひとりですよね。
　その長谷部さんが、つい最近ご自身のブログ何かでも出されているようですし、それからこの東京新聞に載ったのは、共同通信か時事通信か、地方紙に同じのがいくつか載っているのを図書館で見たんですね、（東京新聞2024年10月11日記事を9ページに転載）
　しかもその、この日の翌日だったかな、朝日新聞で、この方が対談で、法政大学の杉田敦史さんですか、語ってる大きな記事の最後のところで一言だけ これについてこれに触れてるって言うのも見たんですけど、要するにこのご自身は自衛隊合憲論であると、だから改憲は必要ないという、乱暴にまとめてしまえばそういう論なんですね。私これにすごく注目というか、そういう立場っていうのもあるんだなと思って面白いと思ったんですが、おそらく護憲派も改憲派もと言うと変ですけど、右も左もって言うと変ですけど、これ相当、刺激を受けるというかですね、反発するとか、議論になるっていうスタンスの持ち方じゃないかなと思ったわけです。
　というのは、だいたい自衛隊は合憲論だって言うのは、護憲派にとってカチンとくる、ま、護憲派って言ってもいろいろありますけどね、 そういう部分があるだろうし、逆のこともまたあるだろうと、改憲派にとってもですね。つまり改憲するなって言ってるわけですから、だけど、そういう意味ではいろいろ議論になりうるんだけど、自分としてはどう考えるべきなのかなというこういうのね。そういうのを考えたときに結論を言うとですね、先ほどのお話に出たように今回のその選挙でまあ 幸いというかですね、発議が不可能になったということで、この問題は当面ちょっと遠のいたって言うのが現状だろうとは思うんです。ただ、長い目で見た場合、こう言う意見がまた出てくるかもしれない、その時に私は自衛隊が合憲か、違憲かって言う議論そのものをいわば棚上げにすると言う形で、改憲不要論っていうのを護憲派が言っていくっていう可能性はないのかなって。もしそう言うことが可能だとすると、ものすごく護憲陣営が広がるというね、 自衛隊合憲論を含めた形でやっていきましょうということになると、ちょっと今までと戦略的なイメージっていうかな、かなり変わるんじゃないかっていう気がしたわけです。ただそれも乱暴な言い方ですから、いろいろ議論になり得るだろう、ただちょっと全く今（改憲云々が）話題にならない情況って言うのはちょっと変だなっていう気もしてるというので、ちょっとあえてちょっとコピーお配りしたと、みなさんのご意見を何らかの機会に伺えると、いいなと思ったということなんです。

　それがちょっと前置きって言うか、私がその先程もお話したんですが、ポジティブな可能性として我々何がこれから出来るだろうって言うときに、順不同って言うかですね、ただ 思いついたのをメモしてきたの順に言いますとね。
1つは 団塊の世代、私自身そうなんですけども 団塊の世代の戦争体験っていう。変な言い方ですけど、要するに戦争体験してないですけど、直接には。戦後生まれたんですけど、戦後すぐだっただけにですね、そのなんとなく匂いみたいなものが残ってたっていう今思うとですよ。戦争直後の独特な、硝煙て言うのかな、煙がまだ残っているような、空気をいろいろ思い出すんですね。
（次ページに続く）

東京新聞　2024年（令和６年）10月11日（金曜日）　単　6

自衛隊の9条明記は不要

長谷部恭男

10月1日付で退任した岸田文雄前首相は、憲法9条に自衛隊を明記することにこだわった。9月初めに、その点を含めた自民党としての憲法改正に向けた論点整理を公表し、新総裁に引き継ぐと述べた。新たに首相となった石破茂氏も、自衛隊の明記に前向きの姿勢を見せている。

自衛隊の憲法への明記は必要だろうか。結論から言えば不要である。自衛隊は9条2項で保持を禁じられている「戦力」に当たるので違憲だとする議論があるが、この議論は誤りである。

戦力とは、戦争を遂行する能力である。戦争は同条1項にいう「国際紛争を解決する手段」、つまり、国家間の紛争を解決する手段として遂行される。私人間の紛争と異なり、国家間の紛争を公正に解決してくれる裁判所は簡単には見つからない。そこで伝統的に、国家間の紛争は決闘で決着をつけてきた。それが戦争である。決闘である以上、勝った方が正しい。敗者は勝者の言い分を受け入れざるを得ない。

この考え方からすると、各国は決闘で勝つため、限りない軍備拡張競争に陥ることになるし、戦火が開かれれば、双方に甚大な犠牲をもたらす。

そこで1929年に発効した不戦条約は、国際紛争を解決する手段である戦争を禁止することにした。この考え方を受け継いで「国際紛争を解決する手段」としての戦争を放棄したのが、憲法9条である。だから、戦争を遂行する能力である「戦力」の保持も禁止されている。

自衛権存在 違憲論気にしすぎ

外敵から不正な武力攻撃を受けた場合に国民の生命や財産を守るため、必要最小限度の武力でこれに対処する自衛権の行使は、決闘ではない。街中でいきなり暴行を受けたときに身を守ろうとするのと同じ正当な実力の行使である。不戦条約も、自衛権の行使を否定するものではなかった。9条も同様である。

日本が外敵から武力攻撃を受けたとき、必要最小限度の武力でこれに対処する、いわゆる個別的自衛権の行使も、そのための組織（自衛隊）の保持も、憲法9条は禁止していない。このことを正々堂々と主張すればよいのであって、自衛隊違憲論を気にする必要はないはずである。

気にしすぎた挙げ句、自衛隊を9条に明記すべきだというのが自民党の主張のようである。

しかし「自衛隊の明記」は簡単なことではない。自衛隊は日本独特の組織である。「自衛隊を保持する」と憲法の条文に書いただけでは、誰に指揮権があり、何を任務とするどのような組織なのかは分からない。どこの国にもある「裁判所」や「国会」や「内閣」とはそこが違う。

不必要な改憲 やめた方がよい

「自衛隊」の保持を明記しただけでは、任務も組織の仕方も不明なので、「自衛隊の組織および権限については、法律でこれを定める」と憲法に書いておけばよいのだろうか。そうはいかない。それでは、国会の多数派で議決できる法律で、自衛隊の規模や権限がどんどん拡大していくリスクがある。現在の政府解釈でも認められていないフルスペックの集団的自衛権も、法律で定めれば認められ、地球の裏側まで出かけて武力を行使することになりかねない。

そうすると、現在、自衛隊の組織や任務について事細かに定めてある自衛隊法の条文を全て憲法に平行移動させることになるのだろうか。それでは、自衛隊に関する条文だけがやたらと幅を利かせる、いかにもバランスの悪い憲法典になってしまう。平和憲法のはずなのに、相当部分を自衛隊の条文が占めることになりかねない。

自衛隊を憲法に明記しても現状は変わらないと言われることがあるが、そんな保証がないことは今までの説明からお分かりいただけるであろう。国会の会派間で改正について合意があるわけでもなく、そもそも不必要な憲法改正である。やめておいた方がよい。

むしろそれまでの政府の憲法解釈を筋の通った説明もなく変更して、集団的自衛権の行使を「部分的」に容認するという「解釈壊憲」を行った2014年の閣議決定を見直すべきであろう。

日本の防衛のためにどうしても集団的自衛権の行使が必要だとい

このてあれに　自民にその理由を十分説明した上で、正面からその旨の憲法改正をすべきである。

（はせべ・やすお＝早稲田大教授）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（６）

それは例えばはっきり強烈に覚えているのは自分のうちのすぐそばに、神奈川県の茅ヶ崎市ですけども、茅ヶ崎駅って東海道線の駅のすぐ前にいつも傷痍軍人の人が白い服を着て、そこに跪いてて多分 足が不自由なんでしょうね、」アコーディオンでなにかもの悲しげな曲弾いてる、 それで まあ、お金を入れて欲しいということで、箱置いてあるわけです。 そういう光景をずっと見てたっていうことやら、あるいは自分の父親がですね、まあ戦争の時、インドネシア行ってたんですけども幸い帰ってこれたから、私が生まれたんですけど、その要するにもう酔っぱらって必ず軍歌を歌ってたっていうのが、気持ちよさそうに歌う、そう言う記憶、それからラジオで「尋ね人」って言う番組が繰り返しやられてて、これ要するに行方不明っていうかそういう人たちのを探す手がかりになるような番組だったと思うんですけども、NHKしかなかったわけです、最初は。尋ね人の時間ですって言うのをしょっちゅう聞いていた記憶があるわけですけどね、 例えばそんな2つ 3つあげてもいろいろつまり、今の若い人にはピンと来ないようなあれこれがあるわけです。そういうことをもっと、団塊世代の我々語るべき、 あるいは伝えるべき何らかの形で、じゃないかなと言うのが1つです。そんなこといってながら、自分で何もやっていないというか、やれるかどうかもわかんないと言う立場なんですけど、ともかく、団塊世代の戦争責任、じゃない、戦争の継承というか、そういう語り部的な部分をね、つまり全くいなくなっちゃうわけですからこれから、だから被団協のああいう受賞って言うのはすばらしいと思うんですけど、その問題が一つ。

それから次にですね、前にこの会でおはなししたかもしれませんけど、つまり若い人の政治的無関心とかいうことがよく言われる過程で、よく言われるのが選挙の投票率の低さって、これ選挙のたんびに 、つまり50%ぐらいしか、半分の人がね、若い人だけじゃないですけど、その投票率を上げるべきだってね 、こんな低いのは嘆かわしいって、左右を問わず、立場を超えてみんな話題にするわけですが、では具体的にどうしたら良いか、いろんなあの手この手あると思いますし、部分的には模索がいろいろある、例えば老人ホームの人をね、ベッドの上でも投票できるようにしてるところが現にあるっていうのを拝見してびっくりしましたけど、そういういろんな細かいこと以上にですね、私はメディアの問題ってことがあるだろうってことで、具体的な話なんですけど、ボートマッチって言うのが、要するに、日本では十数年前に毎日新聞が最初始めて、その後もう、この前の衆院選挙なんかなど朝日や毎日、NHKもですね、主要メディアがすでにやってるわけです。やってるって言うのは、ナット上でアンケートを30問とか20問答えると、あなたは何党との距離感が何パーセントですっていうのがね、 全部瞬時にでると言うね、これすごく面白いものですよ、私試してみて、自分の投票しているところと違うところが、実は一番近いとかですね、そんなことで それがまた、それの良さって言うのは、特に若い人なんか、例えば18歳で初めて選挙だと、いろんな党がいろんなね、綺麗な言葉で語ってるけど、何処にしたらよいかわかんないよって言うそう言う人が多いのは、よくわかるわけですね。当然だろうと。だけども25問とかですね、まあ 5分もかけずにそのパッパッとどれが、つまり原発再開とか再稼働とかね、いろんなことあるかと思うのですけど、消費税がどうだとか、その設問に賛成、反対、 わからない、 パッパッパッパッとネット上でチェックすれば、そのあなたは何党とは何パーセントの距離だっていうのがね、瞬時にでるって言うのはすごく面白い、これを主要メディアがやってるのに、あんまり知られてないって言うのね、と言うことがすごく残念で、それをもっとですね、メディアがやって欲しいなっていう、どこまで効果あるか別としてですね、そんな…。

で、たまたまね、 週刊金曜日の先週号に前川喜平さんがこれを書いてたんでびっくりしましたけどね、それで自分もやってみたけどすごくこれは有効だとか言ってね。たまたま朝日新聞の声欄でも載ってましたね、ボートマッチがいいっていう。珍しくそう言う声がで始めているんで、ボートは選挙、マッチはマッチングの一致度、本当に数字でバッと出すって面白い仕組みでヨーロッパから入ってきたっていうわけですけど、もっともっと普及すると選挙の投票率は多少上がるんじゃないかな っていう気がするんで、そういうことを何らかの形でね、求めていきたいっていう感じがします。

毎日新聞に3年前位に投書欄に出して、送ったら載って、載ったんだけど、何の反響も感想も反論も何もないからちょっと虚しいもんだなっていう気はしましたけどまとにかくそういう声をあげるっていうことかなあってことですね。

後はですね、これは3回位前のこの会でおはなししたんで繰り返しませんけど、要するに「学縁」ていう、地縁血縁じゃない、学校縁っていうのが結構可能性をはらんでいるのではないかって。小中高大ってありますけど、またこの間お話した外国語大学、まさにむのさんの出身校ですけど、東京外国語大学の OB 会がゼミの学生と一緒になって、戦争と外語大っていうのをやったら1000人以上お客が来ちゃってすごく盛り上がったっていうそう言う経験があるものですから、それは例外かもいれないけど、いま学校縁ていうのを活かした、何か、つまりOB会とか、同窓会とかクラス会とか、私も時々いろんな会に出るんですけど、なんかつくづく、もちろんいろんな考えのある人をつないで、何かをやるって言うのは難しいんだけども、地縁、血縁、社縁、とか業界苑とかそういうのもあるけど、学校園、学縁っていうのは結構面白いんじゃないかなっていう気がしているっていうことです。

S.A.：

さっきあの憲法改正の話なんですけど、最近まともに新聞読んでないんですけど、ひとつは田原総一朗でしたっけ、彼が、1～2年前に出した本の中で、安倍晋三との対談を書いていて、その中で、その安保法制ができた後、もうそのアメリカ側からは 憲法改正しろっていう風に言われなくなったんで もう九条は変える必要がないんだっていうようなことを 安倍晋三が言ったっていうのが本の中に出てるんですね。結局9条を変える云々て言うのは、アメリカ側から集団的自衛権行使のためには、憲法改正が必要なんだから現行憲法変えろって言う要求がアメリカ側からあって、もともと出てきてるもんなんだと思うんですね。だから安保法制によって、集団的自衛権の行使が可能になったのでもう アメリカは別に9条改正を要求してこないと、だから自民党としても9条改正する必要がないっていうのが、多分そのインタビューの時の安倍晋三の考えだったんじゃないかと思うんですね。じゃあなんで自民党は憲法改正を掲げ続けるのかって言うと、それはやっぱり日本会議を始めとした保守系の人たちの支持を引き止めるために言い続けてるんだと思うんですね。で、今回先ほどの2/3に行かなくなったかなっていう話だって、枝野幸男、憲法調査会長ですから当然調査会長が委員会の審議を差配するわけで、審議が進まなくなるんだと思うんですけど、でもだんだんだんだん憲法調査会などで、改正を要望する支持率が上がってますよね、改正した方がいいですか、 賛成ですが、反対ですかっていうと最近だと思う 賛成 50%以上だったりとかするんだと思うんですね 、9条改正なんかについても賛成の人が増えてきているんで、そういうい目で見ると、世の中全体がこう世論調査で見る限りは改正の方に向かっちゃってるんで最終的には また自民党がそれを強く言い出してくるかもしれないんですけれど、本音の部分で、自民党も右側が増えちゃっているんでなんですけど、あれはまあ、そういう右側の人たちの支持を得るための一つの運動だったんじゃないかなと思うんですね。

それから、9条改正、その長谷部恭男(早大教授)さんの話なんですけど、自民党が9条改正の理由を言うときに、違憲論がまだ残っているからとか、自衛隊員の子供たちが学校でその教科書にその自衛隊には違憲の意見があるみたいなものを読まされるんじゃ自衛官の子供がかわいそうだとか言いますよね 、あれは､何であんなことを言うかって言うと、政府自身が9条、自衛隊は合憲だと思ってるからだし、世の中的にもそう受け取られているということを自覚してるからわざわざ自衛官の子供たちはとかって言うんだと思うんですよ、自民党の人たちだって政府に自分が入ったりもするわけだし、与党なわけですから、本気で自衛隊が違憲だなんて思ってる人たちは誰もいないはずですよね、だから自衛隊、そういう意味で言うとその、その理由を聞いてると結局「自民党もその9条改正が必要だから改正を言ってるんじゃない」っていうことだと思うんですね。

じゃあ変えていっぽうででも、変えていいのかかって言うことになると、長谷部恭男さんなんかがいっているのは、日本の今の安全保障政策は全てその憲法に自衛隊が明記されてないことを前提にスクラッチして作られている法律なわけですよね。（次ページ）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（6）

だからその自衛隊がやれることが自衛隊法とかなんとかに書かれているんであって、そのやれるか法律に書かれてることしかやれない。←そういう意味で今、自衛隊の行動に歯止めがかかってるわけですよね。それから軍事法廷は基本的には作れませんし、九条があるおかげで実はやれないことはまだ山ほどあるわけですよ。アメリカとの関係で、集団的自衛権の行使は一部できるようにはなったけれども、それでもやれないことが山ほどある。で一方でその9条を憲法に自衛隊を明記してしまうと、その1つは憲法に全く名前を出てこない他省庁よりも自衛隊の方が憲法上、上位にする、法体系上上位にするんだってまず一つおかしいってことが出てきますし、それから軍隊っていうのは､自分で調べたわけじゃありませんけど、 軍隊っていうのは、やっちゃいけないことが決まってるだけで、何をやっていいってのは、法律上はないらしいんですね、日本の自衛隊も憲法上明記されるようになれば、そこはもう今ある法律はあるにしてもですね、基本的には何でもいいよって話になっちゃうと思うんですね、そこはその9条に自衛隊を書くって言うことは今の自衛隊の位置づけを根本的に変えることになるんで、それはやっぱ 絶対やっちゃいけないんだと思うんですけれどとは思います。

2:02:35
F.K.:
　自己紹介的な話になりますけれど、私はね1933年生まれです。91歳です、いま。わたしがこの歳まで見てきた日本っていうか、世界っていうかね、つまんで簡単に話させてもらいます。当然、日本の敗戦の時に中学1年生です。当然それまでの学校教育はいろんな資料でいただいてるとおり、天皇制というか、軍国主義のもうやっぱり、想像する、今振り返ってみるとね、もう学校がめちゃくちゃでしたよね、真理は何か、何も教えてもらわないんだから。戦争体験は私は空襲で逃げ回った程度です。戦争が終わっていろんなことがわかってきたんですね、とにかく第二次世界大戦の犠牲者は6000万とも6500万とも言われている。その7割以上が民間人で、しかも、むろんああいうデタラメな戦争の中ですから、正確な数なんか分かるわけないですよね。だからこれから二度と戦争をやらないためにはね､その悲惨な歴史から学ぶ以外に道はない、そう思って戦後育ちましたね。順番に話すとキリがなくなってしまうので、特徴的なことを言いますとまず憲法ですか。憲法で陸海空軍は一切もたない、って書いてあるわけですよね、前文も立派なこと書いてありますけどね。それがそういうこともあって、それから東京裁判がありました。まだその頃は私は高校あたりですからね、あんまり詳しく記憶してないんですが、60年は、成人になってからの大きなやっぱり印象に残ってるのは60年安保です、あれはね、私も国会行きましたけどね、何であの時、あれほど国民が立ち上がれたか、後にも先にもないですからね、それはどんな考え方もってらっしゃっても、みんな再会（？）するからですよ、戦争をね、その当時の労働者って言うか、ほとんどああいう運動、労働組合でしたからですね、みんな体験しるからあれだけの力になった。ところが、あそこで学んだのはですね、資本の方なんです。あれから労働組合が全部潰されてきます。とくに大手の。だから労働組合､総評が潰されちゃったし、学んだのは、あの60年安保闘争で学んだのは、あれだけの闘争で学んだのは向こう側なんですよ。だから私もとても、当然サラリーマンでしたからね。そういう話は一切出来なくなっちゃった。晩年私は本社勤めで、1000人からいる職場で、こういう話はみじんもできません。そういうことで ずっとそれで学校の教育も家永三郎さんの本を読めばわかる通り、どんどんどんどん右傾化して来ちゃった。ほんとのことを教えない。一番大事なことを、今の学生に、学校でおしえない。、第2次世界大戦ほとんど教えないで学校卒業してんじゃないですか。
　ちょっと古い話で恐縮なんですけどね、2011年、ある私立高校に呼ばれて、夏期講習で戦争の話をして欲しいと言われて、呼ばれて話したことがあるんですよ。2時間半いただいて。私自身も戦争体験者じゃない、本を出してる位で知ってますからどんな戦争をしてきたか。ドイツがどんなことをしたのか、日本がどんなことをしてたかね､それでタイトルは中帰連ていって、知ってます。中帰連の、私、その後の団体の「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」をやってるんですよ。
そんなこともあってですね、「日中15年戦争と中帰連」と言うテーマで高校の夏期講習に行ったんですよ。私が感動しちゃったですよ。壇上に立ってね、あの話をする高校生ですよみなさん。 聞いていて。それでその後、高校生のアンケートまで送られてきましたけど、やっぱりこれ見ると戦争を教わってないですね 。ほとんど教わってないですね。なかなか素朴な感想ももらいましたけどね。そんな経験もありました。ちょっと長くなりましたけど、そういうことです。

M.T.：真珠湾攻撃、ラジオ放送で聞いていると思うんですけど。真珠湾攻撃、ラジオで聞いたんじゃないですか。8歳ですよね。
F.K.：ええとねえ、真珠湾攻撃の時はまだ6年生か。
M.T.：そんな雰囲気でした？
F.K.：「戦争状態に入れる」っていう放送は聞いてますね。その後はもう忘れたけど、聞いてると思いますよ。
M.T.：周りの雰囲気はどうでした？
F.K.:想像つきませんよ、今の社会から言ったら。
だってまず天皇（？）されてますから。人権と自由が全くないんですからね。だから私なんか、天皇教育、 子供でも私はね、おかしいなと思いましたよ。とにかく電車は明治神宮とか行くと、車掌が号令かけて全部最敬礼するんです､させられるわけです。ところがそう言うことをね、身の縮む思いだ（？）天皇がおかしい､そこそれほど徹底してました。

武野：
うちの母がね、やっぱりその時の体験だったと思うけど、真珠湾攻撃の時にうちの母は言ってましたけれども 血の気が下がる思いだった､何にも提灯行列だとか、ああいう気持ちじゃなくて、やっぱり アメリカはこわいと思ってたみたいですよ。あの圧倒的に力が、だいたいあの軍人だって、アメリカに勝てると思ってる人少なかったんじゃないかな。ごく一部の人が強行っていったらおかしいですけど、戦争って流されたんだっていう感じで、一般の人たちは勝てないって思ってたって言うか、て言うよりも、早く戦争が終わってくれってそう言う思いがあって､終戦の時だって、ある意味ではバンザイとまでは言わないけど、そういうようなホッとしたっていう感じを持っていたと、うちの母はそう言ってました。
F.K.：配給制ですからね、もう頭の中からね食べ物のこと話したことないです。

水元：
　すみません、聞いているだけで。いくつか思ったんですけど。私も団塊の世代の最後の方だから、街で傷痍軍人のアコーディオンを聞きましたし、で、クズ屋さんていうと、朝鮮人だよねっていう、それとか混血の子がいるとパンパンの子だよねって、今じゃ混血で、白人系だと格好いいなって、体格もいいし、誰だ、あれ？、パンパンの子だよって、そんなこと、でも何処へ行っちゃったか分からないけど、そういう風景っていうのが、自分が子供の時、何年間でなくなっちゃいましたけどね。 結構町の人がみんなそれが形として、「＊＊＊＊はパンパンの子だよね」「＊＊＊＊＊も米軍の関係だから…」なんていちいち言われているなんてそう言うことを言っちゃだめだって言われている。
　あとさっきあの9条のこと、伊勢崎憲司さんがとりあげられてたときに、もし、台湾かなんかで、自衛隊が戦闘に入ったときに、確かに戦場で中国の兵士と戦うような状況になったときに捕虜規定とかって一切ないって言うんですね。こんな状態の法整備が全然取れてなくって戦争なんかどういう風に整理していくのかっていう、まだそれをまともに取り組んだ協議 なんかしてないんだよね。日本て。その伏線としては（自衛隊を）軍隊だって認めれば、そういう法議論が出来るけど、法議論が出来る前に、軍隊だと認めてないんだから法議論はできないじゃないですか。

（次ページへつづく）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（7）

今日の話でもあったけどあまりに情報って今だってすごい偏ってる。トランプが圧勝したって言ったってあれ韓国やアメリカの中では当たり前だよねって韓国のこれ、たまたま統一日報の記事の中で例えばケネディ・ジュニアが頭のおかしいようなやつだって言っても、あの人がこう、何を言ってたのかって言った時に民主党には民主がないと、戦争の党であって、検閲の党であって、不具合の党であって、巨大製薬会社の、ビッグテックの党、金持ちの党じゃないかっていう、こんな、あの昔は違ったかもしれないけど今はそうじゃないかって言っててそうだっていうことで、共和党の支持者なんかは早く民主党やめてこっち来てもっと煽れって言うような、ね。で、軍産複合体についての、のあの代弁をずっとやってきてるような、今のバイデンとは、それをハリスは継承するって言ってるんですからね。それに対して テイラー・スウィフトって、民主党がビオンセからブルース・スプリングスティーンなんかあの人たちなんなんだって思っちゃうけど、みんなやっぱり見てるんですよね、でも日本はこう言う記事って言うか、言論って言うか、テレビとかって絶対語られていない。これじゃ分からないですよね。

あと、戦争をどうするかっていったときに、今でも思うんですけれど、例えば韓国を併合した時、1910年、その時に。陸軍の宇都宮中将がシンガポールに工作員を送ってて、将来、シンガポールを占領する時にはどこに兵を、兵站経ですよね、それと食料はどこで確保して、華僑の人たちで金を持っている人の家はどうやって、拉致するかとか、そういうプレゼンを立てるための工作員を送ってるわけですよね。記録にも残っている。それからずっと後じゃないですか、第一次大戦の後に第二次世界大戦大戦なんだけどもう戦争って直近で起こるわけじゃなくて その前の準備はずっと 何十年も前から多くの場合してるっていう それを止めさせるって言うことだったら、相当、様々なあの人、金、物の動きっていうものを掌握できてなければ、少数のジャーナリストがいくら動いてても、みんなそれ 秘密だから、後で表沙汰になったとしても、難しいんじゃないかだとしたらどういう方法があるんだろうかっていったときに、多くの人がこの国をこういう風にしたいよね ってこうあるべきだよね とかっていう共通したあのしっかりした共感が持てる ビジョン、それをビジョンのテーマはいくつかの項目であったとしても古くから、古くで言えば キーワードは何かって言ったら自分のされたくないことは人にはしない、仏教で言えばその程度（？）から始まって、これって問題にしたって、満州事変の時だって、あそこに1936年の時の広田内閣の帝国議会で500万人の日本人が住んで満州国を作る、そこ人が住んでんだろ、で、普通に考えれば、そこに住んでる人たちどうするのよって言った時に結局、今イスラエルがやってる 同じことをしてたわけじゃないですか、でもそれって普通にあの子供でも分かりそうだけどそこに住んでたなら、住んでた人たちの側に立って考えたらそんなことしちゃいけないよねっていうそういう基本的な共感を持てるビジョンっていうのを、よりしっかり持ってるか持ってないかっていう、それを絶えず絶えず日本人としての もう宗派とか、なんとかの党とか関係なしに、これは やっちゃいけないことだよねっていう共感をより確かにするようなビジョン、そういう意味での君主制であるかどうかなんて関係無しに幸福度の高い、例えば デンマークなんかだったら君主制ですよね、だけど幸福の、いつも123（？）とかそういう税金は高いですよ、だけど「この国っていいよね」っていうドイツに占領もされたけど国民として何を大事にしたいかっていう共感意識が高いから、ユダヤ人なんかだってあのデンマークだったら、「差し出せ」つっても、スウェーデンなんかに逃がしたり、逃がしたと同時に戦争が終わったら、もとのあなたの、ここに住んでたよねっていって、その資産をその人に返してやるとかって、それって人のものの考え方も向き合い方、どうせみんな死んじゃうんだからこだわりたいよねっていうその大事なもの、どこで共感を仕上げているか っていうその強さをどう思ったらもてるだろうかっていうことが、もし何かの形で論じ合える場があったら。

後、自治の関係で朝鮮の関係はそうなんだけど、台湾て、トランプになってもうお前の国は特別扱いしない、関税だってかけるし、もっと武器買えとか、今まで違ったじゃないですか、バイデンがやってたときも。バックで見てやるからなって。出すもの出せないなら守ってやんないよって。かなり変わっちゃってたら台湾の中でもアメリカとの向き合い方が変わっちゃったらかなり別な意味できな臭いんじゃないかなと思ってるんですけどね。

それと、これ3ヶ月前から、最近のことでメディアで個人的にはすごい変化だなって思ったのは、イスラエルであったことがもとになって、戦後ドイツや日本がどうなったのかって言った時にドイツでは、ドイツ人って戦後0年って言った時にNHK のテレビ番組で取り上げられたけど、ドイツ人って1500万人近くが土地を奪われて、財産も捨ててドイツに帰れと、200万人以上の人たちが、こんな形で死んだと。それとかチェコなんかで、ユダヤ人が公衆の面前で殺されるようにドイツ人もこうやって射殺してましたよっていうそういう映像って今までだったら、今年の夏以前だったらそういう映像ってほとんど流れなかったですよね、今NHKのテレビで流れてるっていうことは、いわゆるユダヤ人だけがやられたんじゃねえじゃんていうのを、別な意味でアメリカって白人、まあ一応白人の国なんだけど、白人のって最大多数4割はドイツ系移民ですもんね。 その人たちの中でも戦後のドイツってひどかったよねっていう、もうずっとユダヤ人の、確かにひどいことはしたんだけど、その後のつけもこんなにひどかったのかっていうことの情報が飛び交っていると第二次世界大戦の時のドイツの位置付け、かなり変わるんじゃないかなと、それが今起こっていることじゃないかな。ドイツっていわゆる イギリスとフランスにとって イギリスだったらイラン、インドを解体してトルコを解体してユーゴスラビアを解体して、第一次世界大戦でハプスブルグの流れと神聖ローマ王国の結束した力、それを解体して最後に残るのはロシアなんだよね。EUを作って、EUは何のために作ったかと言えば、ロシアを解体するためじゃないですか。その途中の中で、ドイツはここまでやられたんだって、そういうのに、あのもう一つ余計なんですけど、なぜヒトラーが政権を取りたかっていった時に、ミュンヘンで一揆をするような時に あの時にある時からトラックを変えたり、制服を作ったり、旗を作ってたんだってあの金どこから出てたんだって言ったら、アメリカのモルガン財閥があの出してたわけじゃないですか。それはフェイクだって言うかもしれないけど、その時の突撃隊のレームってモルガン財閥が、南米の工作をする時の傭兵、あの傭兵隊長ですよね。 それをミュンヘンに送り込んでナチスと一緒にさせて、その時にもう1つアドバイザーっていうことで、アドバイスっていうことで、ナチスが政権を取るまでの間ずっと張り付いていた アメリカから渡ってった旧ドイツの貴族、そのひとがモルガンの金を漏らして（？）たわけだけど、独ソ戦が入ったと同時に、そのアドバイザーとしてついてた人ってアメリカ帰っちゃったわけですよね。そのあと、ナチスとソビエトの間で、第二次世界大戦の時に最大の殺し合いがあって、ドイツもとことん廃墟になったんだけど、ソビエトは残っちゃったわけですよね。その経過の中で、イギリス、フランス、アメリカのあの一部の人たちにとってのプランのシナリオ通りに起こったこと なんじゃないかなっていうのは個人的に思ってて、その今回、表に出たドイツがここまでむちゃくちゃにされたっていう、そのシナリオを、それと同時に、ドイツの人たちも多くて、ナチスが何をやってたのかとかっていう、日本人もそうだけど歴史の主要な話題の中からは多くの人たちは欠落してて、そんなことしてたのかって、ユダヤ人がこんななってたよっていうことだってドイツ人の田舎の多くの人達ってほとんど知らなかったって、それ嘘だろうと思ってもまあ戦争中だからね、ぐらいことで列車で送られたってことでも、そういう風なことに加担をしていた時間はなかったような人が多かったっていうのは、なんかこう歴史っていうか、そういうことをわかってないことはあまりに多いんじゃないかなって。

（次ページに続く）

あの先程言った突撃隊のレームって、ユダヤ人なんですよね。ユダヤ人であって、一時、50万人もの配下を抱えるヒトラーの側近のようにしてたひと、その人ユダヤ人なのに本当にヒトラーはユダヤ人を憎んでたって言うか、言い切れるのかって、だって側近のような人入れるんですよね、しかもモルガンから送られてきた傭兵隊長…、それ追加で。

2:31:07
M.I.：
　かなり久しぶりに参加したんですけど、ちょっとずいぶん違う話になりますが、『戦雲（いくさふむ）』、三上智恵さんが作ったのを、昨日ちょうど2回目を見て、かなり三上さんが言っていたのは、いろんなことを言われているけれども、今、現実にボタンを押せば、戦争が始まるとこまで来ているということを知ってほしいと、かなり三上さん、ていねいに、わからないかもしれないけど、沖縄の石垣とか 与那国とかに自衛隊の基地ができ、弾薬庫ができっていう現実を撮ったドキュメンタリー映画なんですけど、『戦雲（いくさふむ）』それを見て、こういうところに来ると皆さんおっしゃってることが、とうとうと、というわけじゃないけど、自分が知っていることと、なんか＊＊＊場違いな気もしてちょっとね、夫~~本当~~が海外に住んでたりするので、そっちに行ったりしていて届いていましたが、久しぶりに来た方がいいんじゃないかな、と思ってきたんですね。 『戦雲（いくさふむ）』話が1つ。
　あとさっき、むのたけじさんの講演の中で、女性がもっと活躍すればいいんじゃないか、みたいな発言があった時に、私は常々そう思っていて、たまたまちょっとアイスランドに行ってきたんですけど、アイスランドは女性の人たちが普通に半分で、およそいる人たちが普通に責任が重い役割をやっている世界があって、そうするとやっぱり殺し合いとかほど遠いし、そもそも国が北海道と四国を合わせたよりちょっと大きいぐらいに39万人しかいないんですね。軍隊がそもそもない。（軍隊が）つくれない、その人数では。だけどNATOに入っている。国の運営がとてもいいので、そこまでね、下がるとちょっと見習うところがどこなんだっていうのは＊＊＊ですけど、居心地がいいなあと思いました。
　今 トランプになったことで、このまま無事政権を持てるか、命も狙われるとかもしれないと思うし、だけどもしトランプは戦争が嫌いだと聞いていて、唯一トランプが大統領だった4年間に戦争を起こさなかった、というのは事実としてよろしくね、WHOから脱退とか、私リベラルなんで（？）民主党で民主主義が出たほうがと思っているんですけど、それは揺らぎないんですが、とはいえ民主党がやっているバイデン、ハリスがやっている口で言っていることと実際に行っていること、結局ロシア、ウクライナにお金送るから戦い続けられるわけだし、戦争終わらせるためには、それをしないという決断、もしかしたら、ね、人のことを思ったらそれは難しいんだけど、でも戦争終わらせるにはそれがいいのかもしれない、と思ったりしてます。
　普段は私は30代ぐらいの方々と、理学療法士の方とか、作業療法士の方とか、と関わっているんですけど、そういう人たちに対して、今戦争が起こると起こっておかしくないという現実があるんだということを伝えるのも、私ができることかなと。9条を守る会の法で、映画を見たときとかも、子供連れてったりしてそういう発言はしているんですけど、そういうね、20代、30代の人たちって言うのは、戦争が現実にあまり感じないと思うので そういう視点を持っている私はそれを伝えていけるかなと。
後、いろいろ、いろんなことに耳を傾けているうちに、どうも戦後、GHQ に支配されている中で日本とアメリカが交わしたお約束事が徹底的に本当にやるんだなと思っていまして、今気付いています。そこにそれをこう言う認識のある方々と別にして、市井の普通に生活している人たちは知らないし、今ではテレビからだけとまでは言いませんけど、でも自分が考えることを楽しむこととかそういうものばっかりに気を取られるという場所で楽しく過ごしていたら、そういう、その目線がGHQ、 アメリカがいかに余剰の品物を給食で配って日本人を、言葉を選ばずに言えば、愚民化するということを徹底してやっていた面もあるんだなと、今は思っています。 でもう少し、子供を育てていますけど、みんな大人なんですが、神話を知るとか、神話に、国の成り立ち、とか、よろずの神へわりとその精神が普通に自分にはなじむんですけど、それってずっと土地のものを食べて、ずっと心土不二で生活してきたからこそ、そういう、その心が育っている部分があるのでその辺をだいじに出来たらと思っています。

F.K.：
さっきアウシュビッツの話が出たでしょ。今日ね、Eテレで夜10時からやりますよ。 NHKのEテレで、アウシュビッツ関係の映像がありますよ。ちょっと思い出したから

I.Y.：
1936年の始まりに生まれまして、226事件の時には、もうこの世におりました。世田谷区から参りました山路です。耳が遠くなりましてね、でも今日の話はだいたい分かったと思います。でもこの記録はね、とても助かります。ありがとうございます。ちょっとみなさんの今のお話しとは、直接は繋がらないかもしれない。今日のむのさんのお話の中で、みんなが笑ってるところね、私、何で笑ったのか、よく聞こえなかったんですけれど、要するに 戦争が始まってからちゃんと反対してもだめだっていうことは強くおっしゃってて、で、そのことで言いますとね、この前の憲法を考える映画の会で、『琉球弧を戦場にするな』をやって、あの時来られなかったけど、うまい具合に、あのすぐ後に久我山会館で上映してくださった方があったんですよ。で、もちろん行きましてね、あんなにね、ミサイル基地が琉球弧の中にできているっていうことはやっぱり知りませんでしたね。あんなにたくさん。それでミサイル基地がどんどん出来て、ミサイル基地が出来るたびに、アメリカ軍と自衛隊が祝賀のパレードするのよ。私そんなことに税金使って欲しくないと思って腹たてていたんですけど、その中でね、一番ショックだったのはね、いろいろ戦争の準備をしているわけですけれども、戦死した人の遺体を入れるところが、すでに用意されてるんですよ、ぞっとしましたよね。ちょっと選挙の前でしたから、そのチラシをいっぱいコピーして、知り合いのところ廻って、これを一生懸命抑えてくれるのは、日本の今の中では日本共産党だと思うし、それから裏から問題をちゃんとしたし、今度の選挙は、比例は日本共産党にしてねって、私はそうしたいと思ってるのよって。遺体袋まで用意してあるのよってずっと言って廻ったの。開けてみたらね、日本共産党は票、減らしちゃったでしょ。でなぜかなぜかと思ったんですよ。あちこちでいろんな人が書いていて裏金問題はね、赤旗のお手柄なのに、それで自公民を減らしたのに、何か、立憲民主党とか、他の党は日本共産党の手柄を忘れてって言うか、ただ ただ 自分たちが伸びたことをね、宣伝しているって、私本当にそう思うんですよね。ただ来年の総選挙は日本共産党を一生懸命応援しようと思ってるんですけれども、どうしてあの票がね、伸びなかったかって言うと、ということをおっしゃる方がいたのよ。共産党って言う名前を変えなさいっていう人が多かった。で、それは中国共産党とかそういうことのイメージっていうか、同じように考えているらしいの。これから私たちがやらなきゃいけないことは、中国共産党と日本共産党は違うのよっていうことをね、よくよくみんなに知ってもらわなきゃいけないっていうことをね、頑張りたいと思ってるのね。
それからやっぱりね、知ってもらうってこともものすごく大事なんけれど、選挙の後でね、何処の新聞か忘れちゃったけど、柴又かなんかで、選挙のことについて若い人に聞いたら、選挙があるってこと、前の日までしらなかったっていう人もいたって言うの。これはちょっと大問題で、私はネットの SNS とかいうのはやらないので、そういうのやれる人はそれで頑張ってとは言ってるんですけれどね、そんな風にみんながSNSとか言っているにもかかわらず、新聞読まないなら読まないで、それは構わないんだけれど全てそういう世界にいる人は、選挙のあることぐらいは知ってほしかったなと思ってそれを知ってもらうためのいろんなことも、これからやっていかなきゃいけないんじゃないかなって。

日本はもう世界にあの全然相手にされてないって言うけれど、でもね、それは今の日本の代表しているような人たちなら相手にされてないので、もしかして国民っていうレベルでたくさんの人がもう少し、例えば今度ノーベル賞の授賞式に行って田中熙巳さんがすばらしいいいスピーチして下さったりして、それが世界中の人に知って貰えれば、もうちょっと日本を認めて貰えるんじゃないか、トップだけが相手にされなくても、だからって国民まで相手にされないっていうのはね、とても困ると思いました。

S.N.:
　皆さんからいろんなお話聞かせていただいて一体私は何を喋ればいいのかなと思っちゃったんですけど、ここの何ヶ月か、私、自分より若い人たちと一緒にいることが多いですね。私、WHOの問題やってたもんですから、そのメンバーが私より若いっていうか、40代50代の方が多いんですけど、そういった人と話話なんかして、気がついたことをちょっとお伝えしようと思います。
　で、この中にも若い人いらっしゃるので、私の言ってることが皆さんにそのまま当てはまるかどうかわかんないんですけども、私も一応感想として言いますと、まず憲法改正にあんまり抵抗ないんですね。緊急事態条項はものすごく警戒してますが、憲法改正自体に関しては、割と抵抗がなくてそれどういうことかって言うと、あれはアメリカの作ったもんでしょて言うと、みんなそうだそうだって言っちゃうんですよ。で、成り立ちはさておき、憲法っていうのはそんな簡単に変えるものではない、日本の国の根幹ですからね、ですからそのアメリカが作ったから変えなきゃっていうようなことに飛びつかないで、まず日本国憲法をちゃんと勉強をしてほしいんですね、私としては。あれは そのもちろん そのアメリカからアイデアは出てますけど、 日本のその憲法の研究が鈴木安蔵であるとかですね、であるとかね、そういう人たちの思想を取り入れてますし、その時、アメリカの方で憲法作成に関わった人達っていうのは、例えば法律関係の大学院まで出てるとか、そういう結構専門知識を持ってた人が多くて、若かったけれども、彼らが非常に理想に燃えてこういうのがいいんだって言って作ったらしいんです。ですので、アメリカが作ったからダメって飛びつかないで、そこは勉強してほしいなと思います。 YouTuber で結構若い時に人気がある人がいるんですけど、皆さんご存知かどうかわかんないんですけど、深田萌絵さんっていう女性なんですけどもね。深田さんがやっぱり憲法変えなきゃと言ってて、ある時あの勉強してみたら、これ、すごい憲法だったからやっぱり変えるのは良くない、良くないはねって言い出して、ま、そういう感じです、憲法改正に関しては。
　それからもう1つは、どうも日本民族が優れているっていうのが好きなんですよね、 例えばすぐに日本（？）の国柄とか言い出したり、日本らしさとか、だから名前をつけるのも、ヤマトっての入れようとか、そういうふうになんかその日本が素晴らしいっていうような考え方っていうのをちょっと感じるんです。で、それすごい怖いことだと思って世界中にはいろんな人たちがいるんでどこに私たちは優れているっていう考え方って私、持ってませんし、その日本民族が優れてるっていうのは、戦争の時にすごいなんか宣伝されて、それでそういう変なところ行っちゃうとものすごい危険だと思うんですね。で､天皇制も抵抗ないんですよ、割と。で、その2月11日なんかをあるじゃないですか、いろいろと、するとそれに行ってきたわ、と言ったり、投稿したりするんですね。ですのでそこもやっぱり日本が、日本が、取り分け優れているとか、天皇制賛成っていうのはちょっと怖い動きだなと思っていて、私 個人は、その天皇制っていうのは 要するにある種、そういう装置として使われたと思ってますので、その日本をその間違ったことにかり立てていく、駆り立てて行かれたわけですね。それにその天皇制ってすごい使われたわけなので、そういう装置としての怖さって言うものを何とか伝えていければいいなと思ってます。
それと同じにその自虐史観というのはすぐ言い出すんですよ、わたしたまたまちょっと若いジャーナリストの人で、そのやっぱり自虐史観が良くないっていうこと言ってる人がいるので、ちょっとその人にどういう意味で言ってるのか、ちょっと聞いてみたいと思うんですけども、やっぱり日本という国もいいこともあれば悪いこともあったんで、悪いことがあったのはまあそうなんだっていうことで、それは取り立てて日本を貶めるわけでもないので、やっぱりその辺もなんかうまく伝えていけたらなと思ってます。

なんかちょっとすごいネガティブなことをいっぱい言っちゃいましたけれども、実際すごく 皆さん熱心にやられてて、やっぱりそういうこともまあいろいろ話していただければ分かってもらえると思うので、まあその辺ちょっとその怖い方向に行かないように、なんかそのできればなと思ってます。
S.H.：
えーと2回目です。 先ほどの、今までのお話本当に皆さん、どっかでやっぱり心が繋がってるっていう感じはするんですね。いろんなことを考えさせられる発言が多かったんですけれども、「じゃあ、いったい我々、どうするか」みたいな話になるかと思うんですけれども、うちの方は山の会を下町の方でやってましてですね、会員は30そこらなんですけど、小さいんですけども、僕らが今、一番重要視していることは、「平和学習」ということをしてましてですね、僕も団塊の世代の端くれなんですけど、一番最後ぐらいですね。ほとんどあの高校時代も明治維新の後なんかほとんど教えてくれなかった。授業がなかったですよね。そういう時代だったんですけど、そう過ごしてきましてですね、それで平和学習でいろいろやったんですけれども、3週間前か、10月の20日、 我々は鹿児島に行ってきました。鹿児島にですね、陸軍特攻基地があるんです。それから海軍の特攻基地、これは知覧ていって非常に有名な所なんですけれども、両方行きましてですね、非常にびっくりしたんですけども、知覧にですね、知覧の特攻隊の隊員たちが、 通った食堂っていうのがありまして、今宿泊もできるというところがあるんですね、そこは今、旅館と資料館になっています。初代の人はもうお亡くなりになっていて、2代目の人もお亡くなりになっていて、その奥様が三代目、いま、4代目の方が継いでますけれども、朝、夜は食事無しですね、朝ご飯食事付きなんですけど、７時半から9時半までなんとなんと2時間、僕のように途中でろれつが回らなくなったとか、滑舌（？）とかそう言うことなくってですね、 「おばあちゃんから聞いたことなんですけど」とかいって話し始めまして、2時間、そこで我々足止め食って、話を聞いてきたわけなんですけれども その人36歳とか言ってましたですね。大学は鹿児島なんですけど、茨城大学の大学院はいりまして、理科系で勉強しましてでですね、東京のIT関係のお仕事をしたんですけど、自分のお母さんから、どうしても帰ってきて継いでくんないか、と言われて、今ここでこういうことをやってます、と言うことがあってですね、それはそれはですね、とても感動的なお話が続きました。で、僕がですね、最後にお願いしたいのですはですね、こういうお話を僕ら、じいちゃん、ばっちゃんばかりでなく、こういうじいちゃん、ばっちゃんに話するのもいいんですけど、 世代継承っていいますかね、こう言うの次世代に対してやっていただけますか、高校生たちの修学旅行とか、あるいは部活動とかですね、そういうことで来られる方たくさん大勢いらっしゃるでしょう、高校生、大学生、あるいは新入社員とか聞いたら、ほとんどいないですね。こう言う戦中、戦前の話をして下さる語り部って言うのがですね、もっと専門職としては、県立、何とか平和会館て言うのが出来ますけれども、民間ではほとんど対応できてない、で、来る人もいないって言う、その朝食会にも我々だけっていう形だったんですね。で、東京に戻りました。僕そのうち非常に大切な話だなあって、僕らの仲間、それこそ日教組とか、昔の教員やってた人たち 2、3人聞きました。そしたら子供たちは広島にさえ行くのだってね、 親御さんから遠い、お金かかるんでしょってことですね もう否定的。尻込みになってきてるって今の状況なんだそうです。ましてそれが鹿児島なんて言うと、みんな聞き入れられないって言う情況なんですね、その旅館は冨屋旅館って言いいます。

M.I.：映画で見ました。
S.H.：映画で見たんですか。あの開聞岳の写真が庭の方にありましてですね、そこをめざして行って、特攻隊が飛んでいって開聞岳が見えたよって、隊機の羽根をゆらしてですね、万歳ってこう言って、帰りの航空の燃料なんてないもんですから、行きしかないわけですから。そこで行ってお別れをして、帰ってこない、戦死する､特攻するっていうことをやったところなんですけど、そういうお話がですね、聞こえるわけですね。
そのおばあちゃんが、お母さんだと思って、団子食いたいんだけど、と言うと作ってあげるとかですね、そう言うことをしてあげた初代のおばあちゃんがいるんですね。陸軍の指定の食堂ですから、内緒だよ（？）ということで、ほとんどその家族しか知らなかったことをたくさん聞けます。みなさん、ぜひ機会がありましたら、お子様、それからお孫様にそれから回りの人たち、とくに若い世代の方にそこに行ってですね、話を聞けばいいかと思います。お風呂なんてないんです。家族風呂なんですけれども、とってもいい時間を過ごすことができると思います。
それからもう一つ僕がびっくりしましたのですね そこにですね、僕は知らなかったですけど、みなさんは知ってるかもしれないんですが、そこに陸軍の特攻隊基地があるわけなんですけど、そこにですね、1階の片隅の方にですね、パネル＊＊＊（？）がありまして、戦艦大和の館長の話が出てくるんです。伊藤整一って言う人なんですけど、 54歳で亡くなりました。戦艦大和は沈没してですね。その時その艦長がなんて言ったかが、そこに書いてあるんです。それはですね、戦艦大和に残っている最後ですよ、戦艦大和を護衛する飛行機なんか一機もないんです。護衛艦て言うのは３隻、4隻あるんですけど。軍艦の、アメリカの飛行機がわーっとくるのを艦砲射撃の大砲撃ったって効かないじゃないですか。それをですね、やろうとしたのは海軍特攻っていうことなんです。で自分は艦長は行く前からね、 日米開戦は反対ということを言ってたんだそうです。ですが、始まってからですね、その艦長は残っている乗組員を甲板に集めてですね。言うんです。「お前らここで特攻作戦を中止にする」いいですか、艦長自ら（？）が言うんですよ。「お前たち、生きろ!」って言って自分は艦長室に入っていく。お前らのことを助けてくれって、護衛艦の方にも言ってあるから、飛び込んだ奴は助かるからと言って、自分はひとり艦長室に入って54歳の時に死んだ、その息子はと言うと、その息子は沖縄の特攻隊にいてですね、結局は特攻隊になって死んでしまいます。父親と子ども、このですね、その伊藤整一って言う人は庭仕事が好きで庭に桜の木を植えたんですね、それを枝分かれしていって孫の桜の木を今、枕崎のですね、火之神公園って言うのがあるんです。そこのところにと植わってあります。父子桜、父と子の桜、それのですね、説明談があるんですけども、僕らはいつも説明を声を上げて音読するんですけど、読めなかったので、代わってもらったんですけど、それぐらいにですね、戦中とはいえですよ、兵隊とはいえですよ、けしてね、天皇陛下万歳って言って飛び込んだわけじゃないってことですね。それくらいの日本人がいたってことをですね、やらなきゃ行けないんじゃないか、平和学習って言うのは、よりすごいことだと思いますので、是非お願いしたいと思います。
も少しいいですかね。その一番の問題って言うのは、僕は、日本の独立だと思うんですよね。日本が独立してないじゃないですか。日本が独立するってことを考えれば、アメリカの呪縛、沖縄がどうのこうのってありましたけど、その呪縛から離れてですね、僕は日本がちゃんとする、そのためには政権交代が必要なんでしょうけど、それを大きく変えれば、日本はビジョンを持つことが出来るし、それから、北朝鮮から相手にされないなんてことでなくて、そうなのって言うのでなくて、相手にされるような国に我々が自身が主体的、積極的にかかわっていけるようなそういう時代を作っていければなあとと思います。
埼玉県に高麗って言うところがあるんですね、これあの渡来人が来たから高麗って読んでいるんですけど、その高麗の駅前に行きますと、石器時代住居跡って言うのが国指定の文化財になってあります。ご存じ、行かれたことがありますかどうか、さっきむのたけじさんの講演会で、僕ら聞きました。
むのたけじさんなんて言われたと思いますか。「戦争なんて起こったのはたかだか、2000年しかないです。2000年ちょっと前から3000年くらいしかないです。
その前の旧石器時代、縄文時代には人間､人類って言うのは戦ったことがない、まあ東京の国立博物館で、「埴輪展」やってますけど、あれは古墳時代、弥生時代からなんです。それに米作が始まってですね、これは俺の土地だ、この稲は俺が作ったものだ、俺たち他の奴には生かせないってことでやってきた、それを古墳時代から（？）ってやってきたわけですよ、日本の場合はね。エジプトはピラミッド作ってる。これピラミッドとか古墳を作ったのは誰だって農民ですよ。そう言うことをやってきて経済、あるいは人間の社会の中に分断が出来てしまっている、階級が？＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊できてしまった（？）みんな平安時代まで一般の庶民は竪穴式住居に住んでいたんですよ。これは僕の考えでなくて、港区に行けば、そういう縄文遺跡跡というのがあって、それぐらいですね、一般庶民はそういう暮らし方をしていた、でもみんな仲良く攻めあわなかった、戦争なんか出来なかったというのが一般庶民、全部やらせられた（？）日本のことなんでで、その辺のことを頭に入れて、 次、是非、つまり渡来人が来る前の前の何千年も前からあそこには歴史があったってことですね。要する今、国有財産（？）になってるわけですけど、そう言うことを我々自身がもう一度目を覚まして、むのたけじさんじゃないですけど、目を覚まして自分の足元、回りのところから少しづつ構築していければなあって、そういう社会をですね、作り直していこう、作っていこうと言うことの動きをはじめて行きたい、そのためになんか、言いたいことがあったら何でも言いましょうってことで終わりたいと思います。

S.N.：
さっき発言して、自分で気がついたんですけど、私がいろいろ言いましたけど、それって、その世代にもしかしたら関係ないじゃないかなって思いました。
というのは、私こういう集まりに来ることが多いもんですから、そうするとやっぱり考えてることがちょっと違うんでね。でもそれは世代じゃなくて、あんまりこう言う集まりに来ない人とか、関心持ってない人っていうのはやっぱり、その年齢に関わらずそうなのかもしれないなっていう風に思いまして、ちょっとその年齢､世代で違いがあるって先ほどの発言はちょっと思慮が足りなかったと思いましたので撤回します。

司会：
ありがとうございました。私もちょっと意見を言わせていただきます。あのちょっとそろそろ時間なものですから、まとめにかかりたいと思うんですけれども、すごく皆さん ,私はこの3ヶ月の動きっていうのがよくわかんないでると言うことで そのことについても皆さんのご意見をお聞きしたいなっていう風に思って今お聞きしてなるほどなるほどと思っていることが多いんですけれども、1つはさっきの土田さんがおっしゃってた通り、憲法改悪が少し遠ざかったという、それはそういう風に考えたいんですけれども、だからってね、安心しているっていう話じゃなくて それはまたそれが起きてくるからっていう話じゃなくて、もうすでに集団的自衛権を容認した時点で憲法は改悪されてるわけですよね、9条が変わってしまってるわけですよね、現実的に。でそのために 先ほどお話があったような南西諸島のミサイル基地であるとか、そういったのがどんどん準備されていく、決して憲法を変えないことがあの戦争をなくす、戦争しないで済むことにならない、というよりはもっと切実、緊迫してるんじゃないか、今日のむのさんの映像にもありましたけど、「戦争は始まったらもう止められないんだ」確かにそしてまた戦争ってすごく偶発的なところから始まりますよね、それが、あの作為的な、仕掛けられたものであるかどうかは別としても、今一旦偶発的であっても、さっき台湾有事ももう問題にされないんじゃないかと言ったけれども、そういった（戦争を）意図する人がいたというか、動きがあればもう止められない。 （次ページに続く）

資料❸　第10回むのたけじ反戦塾（2024年11月16日）の記録　（11）

この2回前ぐらいの時に、自衛隊の問題について皆さんのご意見聞いたんですけれども、そしたらこの自衛隊っていうか 、いわゆる日本の軍隊がどういう風に変容するか 日本の社会がどういう風にいざ戦争が起きたら、さっきあの韓国の大統領も自分のなんか人気を高めるために戦争（を起こす） 今まで歴史的にもそういったのってすごく多いんですよね。関心をそらすために。石破さんだってやるかもしれないし。それと、やはり あの結局は集団的自衛権のっていうことによって、憲法を改正、変えなくてもいいからっていう風なことになったんで、あのさっき安倍さん､安倍首相が言ってたていう話ですけれども、アメリカ、全てアメリカだと思うんですよね、今の情勢って、だから日本が憲法を変えないで済むようになったから戦争から免れるということは全然ないんであって、まあトランプがどう言う（政治を）するかっていうのはいろんな読みがあって、それはそれで注目していきたいところなんですけれども､私がこのところ、この半年位､あるいはもっと前からなんかしれないですけれども、いわゆる 日本の基地、戦争の準備っていうのにすごくやっぱりなんとかしなきゃいけないって焦りを感じるの、それがこの3ヶ月の間の動きによっても全然変わらないし、もっともっと危険になってるっていう気がしてならないんで ということを感じました 今日の話の中であのすごく納得のいく、なるほどなと思うこともそうだし、いろいろあったんですけれども、これから最近の「映画の会」の方の傾向もそういった戦争を戦争っていうのが、遠いところにある戦争じゃなくて、自分たちが関わる戦争っていう、これから始める戦争って言いますか、むのさんの話の中にあのスローガンじゃないですけれども「戦争をいらぬ、戦争をやらぬ世へ」っていう風なのがよく、私たちもよく使ってんですけれども、私は意図的にこれを「戦争をさせぬ世に」と切り替えてんですね。私たちが戦争をやるってことじゃなくて、（戦争を）させないようにしなきゃいけないっていうところに「反戦」っていうの意味を持ってきたいなと思ってんですけれども。
今までのものをまとめながらですね、前回確かにそうだなと思ったことの一つに、要するに「戦争主義者」と「平和主義者」どっちが多いかって言ったら、平和主義者の方が多いに決まっている、という話で、だからそこをこう力にしていかなきゃいけないっていう話がありましたけれども、なんかそういう風な、これから行動っていうか、実際の 動きとしてどういったことを広げていくかっていうことをちょっとこれからも考えていきたいなと思います ここまでが私の意見です。

私から先が「これからどういう風にやっていくか」っていう話でのご相談なんですけれども、一番頭にも言いましたように、そろそろまとめていって、できるだけ、それを発信できるって、発信って言ったら大げさですけれども、なんか人に伝えられる材料を作っていきたい、役に立つものを作っていきたいなっていうこと武野さんとも話をして て、1つは、このコツコツ貯めていた皆さんの発言っていうのを、この発言の部分だけを1冊にまとめて本当にこういう形の資料ですけれども、作ろうかと思っています。で それでただこの聞き取りっていうのは、私はあんまり上手じゃなくて、かなり。間違いが多いんですね。ですから今から1回目から10回目今回までの分をまとめますので、それを校正してほしい、発言した方に。で2月の次の回、今2月を予定してるんですけれども、それまでにお送りしますんで、ご自分の発言だけでいいんで、これ間違いだよ っていう（指摘）が1つ、それから これは削ってほしいなっていうのが1つ、それさらにもうちょっと付け加えるとできればその出典であるとかですね、何をもとにこれを読むともうちょっと詳しいことは分かるよ、みたいな知っていることを教えていただいて、また戻していただいて、それを校正したものを、5月ぐらいの次の回のあたりにまた出したいと思いますので。
私が今考えているのは、各発言の前にですね、キャッチをつけたいんですね、この発言の内容はこれについての発言ですっていうのが分かるのを 付けていきたいんで。それに対してもまた「そうじゃない」ということがあったらですね、直していただいて、それをもとにさっき武野さんもおっしゃってましたけれども、内容的にですね、ちょっと分けていって、例えばやっぱり今まで出てきた話の中に「もっと歴史を知らなきゃいけない」とか、あるいは「メディアの問題はこういうメディアはおかしい」ってことだとか、いくつかのテーマがありましてね、「教育の問題」だとか、あるいは「自衛隊っていうものをどう考えるのか」それをこう寄せて行って５～10ぐらいのテーマに分けながら、自分たちがこれまで話し合ってきたことを、これまで行っても出し合ってきたことはこういうことだみたいなことにしていくことができたらなと思っています。
それと先ほどありました皆さんの発言について校正をしていただきたいということの中なんですけど、お手紙の方にちょっと書きました「もし差し支えなかったら、あのご自分の名前で」今までイニシャルなんですけれども、出すことが問題なければ、そのことも教えて欲しいと。やっぱりイニシャルの方がいいと思う、イニシャルの方が発言としてすごくいろんなことが言えるということもあるかと思いますので、そういった判断の方はイニシャルのままで通しますけれども、なんか整理してるとちょっと 発言の途中でまた イニシャルに変えたりしてですね。例えばこういった資料が「残るもの」としてあるんだったら、それぞれの方がどういったことを考えて、どういったことを言ってるかっていうことを、できれば出したいなと思いまして、そういったことで、ちょっとご検討いただければと思います。あの決して無理強いはしません。
もう一つ、やっぱり私の何て言いますかの意見なんですけれども やっぱりこの資料っていうか皆さんの発言の記録をまとめていくと 本当に2年前の話でも忘れてることがすごく多い、でなおかつ世の中の動きっても本当に半年前のことであってもあれは一体どうなったんだろうかっていうのがそのまま放置されてることはすごく多いなっていうことを感じましてですね、まあ 8月を目指して、今、あの戦後80年 あるいは 安保法制 10年っていう目標を作っていくっていう中で、やっぱりこの10年間の間にどんなことがあったかっていうのは、私は「映画会」をやる時の資料として年表を作るのが好きなんですけれども､事項としてですね、この間は「日米関係の年表」っていうのを作ったんですけれども、そういったことを、この10年間やってみると、やっぱり自分たちは何をしようとしていたのかっていうのは1つ分かってくるかなっていう風なこともありまして、そういったこの10年間、さらにできれば戦後の80年間、とくに私たちが目指している反戦、戦争をなくす、戦争をさせるということにおいてどういう風な事象、それは例えば市民運動はどういうことをやってきたかとかですね、いくつかの側面があると思いますし、海外との関係はどこだったのかとかで、その中でそれをこう 自分たちはこれから、そういったものをどういう風にしていこうとしているのか、どういう風にしていきたいのかっていうことをまとめられるようなものになったらなと思いますので、もし皆さんお手伝いよろしく、途中でチェックしていただくということでも結構なんですけれども、よろしくお願いしたいなと思っております。
ちょっと時間なものですから、このあたりでと思います。

阿部:
ですから本の話なんですけど。会の中での発言って、断片的なものが多いじゃないですか。だから希望者だけでいいと思うんですけれど、まとまって書きたい人にはそれとは別にまとまって書くあれを設けたらいいんじゃないかなと思う、提案です。
司会：分かりました。そうですね、加筆してて言うか、…
阿部:あの発言してないことを書くわけにいかないじゃないですか。
武野：発言してないのを書いてもいいと思う。この会に関連してたら。なかなかあそこで発表しするのは難しいでしょ。
武野:細かいことはまた後で。
司会:本なのか、あるいは資料集なのか、っていうのはありますけれども、それを作っていくっていうことも、この後の2回の話し合いの中で、あるいはその8月に予定しているイベントと言いますか、どういうことをやるかっていうこともあの皆さんと一緒にこう作っていきたいと思いますまた次は2月を予定してますけれども、ちょっと映画会とダブりまして。よろしくお願いします。

資料❹　第4回から第6回「むのたけじ反戦塾」のまとめ（1）

第４回から第６回「むのたけじ反戦塾」のまとめ

第四回むのたけじ反戦塾は2023年8月26日に行われました。
このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。
「100年インタビュージャーナリストむのたけじ」の後半が上映されました。
「希望は絶望のど真ん中に」第２章「農耕の中からなにゆえ戦争が」後半、
戦争が公認された根拠は皆無／日中戦争を見て、日本が中国に決して勝てるように戦争は今まで誰からも認められたことがないことです。
その他、私たちと関連する活動をしている中帰連／不戦兵士・市民の会／PCP徳川の平和を知る・考える・伝える会からのメッセージを資料として提供されました。

話し合いの主な内容
今回も軍拡路線に走る政府の動きに懸念をする動きが多くある中で、戦後生まれが85%を越えているのです。だから、今まで経験してきたことをどのようにして次の世代に継承し、誤りのない世の中の流れに向かわせることが大事であるというのが、今回の話し合いを見ていて大きな柱となっているように見えました。
　ひとつは今年が学徒動員80周年と言うことで、また、むのたけじも卒業した東京外国語大学が創立150年と言うことも合わせて、自分たちの大学と戦争の関わりを調べて、学園祭で発表しようと言うことで、OBの私も手伝いました。東京外国語大学はいろいろな外国語をしている関係で15年戦争に深く関わっているわけです。そうした関わった人がその後どうなったか、遺族はどうかなどを調べるわけです。たとえば、ラバウルで刑死した片山日出夫氏、芥川龍之介の息子芥川多加志氏、映画「ラーゲリから愛を込めて」で描かれた、シベリアでなくなる山本幡男氏などについて発表しました。卒業生を対象にすることで自分たちとつながる漢字があるわけで、学徒動員を考えることになったように思います（K.S）。
　中国が戦後日本との友好関係を築こうとして、いわゆる撫順の奇跡と呼ばれる戦犯に対して自分たちの思いや生活をも犠牲にして人間らしい扱いをしたことなども伝えなければならないことです(F.K.)。
　NHKは戦争のドキュメンタリーを数多く放送しているのですが、もういとつ「戦争アーカイブス」という戦争証言集です。ものすごい財産で、自分のもったテーマ、切り口で検索も出来ます。ただし、「加害の歴史」とかは扱っていないので、NHKの番組にその時日本人はこういうこともしていたと付けて自分なりのテーマにし他ものを作るようにしてはと思います(H.N.)。
　伝えるものは過去の戦争のことだけではない。たとえば、東京都港区には三田台公園という縄文時代の遺跡のある所がありますが、そこにある説明板には縄文時代のあとに古墳時代がやって来て、権力を持つものと持たないもの差が出来て、争いが起こるようになった。それまではお互いに協力しなければ生き血家内縄文時代が1万円くらい合ったと言うような人類の歴史も必要なのではないか(S.H.)。また、今「台湾有事」とか言われていますが、1972年の日中共同宣言で「恒久的な平和友好関係を確立する」と決められたことも確認し、伝えなければなりません（Y.S.）。国を守ると言うことは力でなくとも話し合いで出来ると言うことです。
　このとき、もう一つの話の塊は地方政治に希望を持っている声が聞かれたことです。
　政府の方針と違う政策をかつてもしたことがあります。横浜市の飛鳥田一雄市政（1963年4月から1978年3月）はいろいろ革新市政独特の政策をしますが、特筆するべきは国内の反戦運動の世論を受けて、「戦車輸送阻止闘争」とか、「村雨橋事件」と呼ばれることをします。ベトナム戦争で破損した戦車を相模総合補給廠で修理し戦場にもどしていましたので、補給廠と横浜ノース・ドックの間で戦車を載せたトレーラーが往復していました。ベトナム戦争終盤の1972年に橋の重量制限を理由に100日間この輸送を止めたのです。こうしたことも、伝えるべきことにもはいるものかも知れません(Y.S.)。
　最近では明石市の泉房穂さんが４期勤められて、18歳まで医療費無料かなどよい政策をされています。まず自分たちの住んでいる自治体から政治を変えていくことで可能性が広がるように考えます(S.N.)。
　いずれにしろ、ウクライナ戦争を見ていると、アメリカは頭がよくて自分お国の兵隊を使わず、ウクライナ人を使ってロシアと戦争させている。だから、アメリカ人の犠牲がないからベトナム戦争の時のようなの反戦運動がおきない。これをよいことに、もし台湾で何かが起きても、アメリカの兵隊を使わずにアジア人同士で戦争をやらせるようにするだろう(T.I.)。だから政治をあきらめてはいけない。

第五回むのたけじ反戦塾は2023年11月23日に行われました。
このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。
「むのたけじ100歳のつどい『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』」が上映されました。
「希望は絶望のど真ん中に」第３章「人類の余命は40億年か、四十年か」を資料として提供されました。

話し合いの主な内容
第5回反戦塾はその少し前にイスラエル軍がガザ市の完全包囲し、パレスチナ人のジェノサイト（集団殺害）が行われるのではないかと言う報道があった少し後の開催になりました。ウクライナーロシア戦争も収まらないなかで戦渦が新たに生まれたわけです。そうしたこともあるのかも知れませんが、日本は現在の穏やかに生活できていることに思いを寄せる話が幾つもありました。
　子どもが3人いて、一番下が有名な大学の政治学科に通っている大学1年生で、政治の動きとかにほとんど無関心でいるが、こうした無邪気な生活がいつまでしていられるのだろうか（S.A.）。毎朝起きた時自分の感謝するべきことを10くらい書くのを習慣にしているのですが、そのなかに爆弾が飛んでくるなどのことが心配なく生きていられることが入るようになった(S.N.)。
　確かに、日本は戦後80年近く爆弾が飛んでくるようなことはなかったし、自衛隊が直接戦闘にからんでいくこともなかった。ただし、日本は本当に戦争と無関係にいられたかと言うとそうでもない。日本の戦後復興は朝鮮戦争の軍需需要により成し遂げられたし、ベトナム戦争ではあの枯れ葉剤の原料が三井東圧化学（現三井化学）大牟田工場で供給されています。その主成分のダイオキシンにより障害を持つ人が多くいるので、やはり恨みをもたれるのではないか(M.M.)。
　今回の反戦塾で特に話題に上ったのが日米安全保障条約と核の抑止力です。今、日本人の相当多いパーセンテージの人が日米安全保障条約を肯定的に受けとめていると言われ、ほんとうにだまされているように思うんだけれどアメリカが日本を守ってくれるとアメリカの核の傘による抑止力を頼りにしている(H.I.,Y.O.)。しかし、このことが日本が戦争に巻き込まれる懸念材料にもなるという認識を持つ人は少ないと思う。過去にさかのぼれば、アフガン戦争でもイラク戦争でも、アメリカの戦争に自衛隊が駆り出されて、戦闘に巻き込まれる危険性をおかしている(S.A.)。朝鮮人民共和国が核実験などに関してもアメリカのことを考えてのことで、日本が関係あるとすればアメリカに付いているからです。
　一歩踏み込んで、逆に日本が日米安保条約を必要としている理由を考えると、かつて植民地にした近隣の国々が怖いからだと私は思うのです。そのことを理解するには日本の近現代史をしっかり学ぶことが必要です。しかし、日本では学校教育の歴史は縄文時代から始まり、明治政府のところで教えるのを終わり、近現代のころはなおざりです。中国や韓国などの近隣諸国では近現代史から始じめたり、近現代史を単独の教科にしてしっかり教えている（K.N.）。近現代史はまともに教えないばかりでなく、関東大震災のときの主に朝鮮人の虐殺や1万人
（次ページに続く）

資料❹　第4回から第6回「むのたけじ反戦塾」のまとめ　（2）

近い人が犠牲になったかも知れないといわれる徴用工の朝鮮人が帰るためにのった浮島丸の沈没など、数々の疑惑が語られているのにまともに向き合っていないということがある(M.M.)。よく話題になる従軍慰安婦問題も忘れてはならない。

こうしたことが日本に不信感をもたれる要因になっていると思われる。第二次世界大戦の同じ敗戦国でありながらドイツはワイツゼッカーという有名な大統領の「過去に目を閉ざすものは、現在にも盲目となる」ということばでもわかるように、徹底的に戦時中に行ったことを子どもに教えて、学校でも近現代史をしっかり教えている(F.K.)。それでもAFDと言う右翼が出ているけど、日本人の子どもたちは何も知らないで自民党に投票しているけど、これでよいのか(Y.O).

ドイツはしっかり過去に向き合ってきたから、欧州連合（ＥＵ）の主要国として活動し、近隣国から戦時中のことが言われていない。一部の日本国民からいつまで謝り続けないといけないのかという声を聞きますが、日本人の姿勢が問われているのだと考えます。近隣諸国と直に向き合うことをせずに、日米安全保障条約を背景にして東アジア諸国と対峙していることが不信感をもたれる要因ではないか。

「戦争は些細な差別意識から始まる」と言われている(Y.O.)。だから、今回上映した講演の中でむのたけじが「相手を知るには敬う合い　学び合う」ことをと言う言葉がありましたが、それにビビットときました(K.N.)とありましたが、まさに互いを理解するには敬い合い学び合う姿勢で対応し、なにか問題が起きた時は話し合いで解決するというのが新しい時代の国際秩序を保つ方法に変える時代になりつつあるように思います。

これを書いているのは2024年10月2日に書いているのですが、宮崎空港で不発弾の爆発事故があり、たまたま上に何もない時爆発したので人的被害はなかった。戦後79年立ってもこのようなことが起きるのが戦争です。その時だけの問題ではない。長く被害をもたらす戦争はしてはいけないとつくづく思いました。そうであるのに、一昨年からウクライナとロシアの間の戦争、今、イスラエル周辺国との戦争と戦いの炎が広がっています。これまで日本人の多くが信じてきたアメリカの核の傘による秩序の維持は出来なくなっていると認識するべきだと思います。そのことを考えて日本人は行動を考えるべきです。

第六回むのたけじ反戦塾は2024年1月20日に行われました。
このときの話し合いの参考になればとして提供した映像と資料などは以下のとおりです。
秋田市にある県立明徳館高等学校PTA主催特別企画「99歳ジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』」の模様を撮影したビデオを上映されました。
「希望は絶望のど真ん中に」第４章「みんなの課題はみんなで取り組む」前半部分、

そのほかに北条常久さんの「世界に飛び出した『秋田人』むのたけじ、『たいまつ』を休刊して海外へ」を資料として提供されました。

話し合いの主な内容

冒頭に司会者から、①いまの「台湾有事」などの危機が叫ばれているけれど、これをどうとらえるか、②15年戦争などの過去の戦争はどういうところで、どういう風に始まったか、③加害責任について、④現在の危機意識や今までの戦争経験をどのように伝えていくか,の4つテーマが提案された。

これを受けた話し合いは④のどう伝えるかが４つの項目で一番大きな塊になったので、ここから始めます。

特に若い人にどう伝えるかが議論になりました。
そのひとつは、撫順の奇跡の話を世田谷にある高校が夏期講座でしてくれと言われて話した経験です。時間が短いので、戦犯の人達の証言を撮っているDVDも端折ってしましたが、話が終わったあとに男子生徒が握手を求めてきたことからも、高校生に何か伝わったように思います。それにつけても、第二次世界大戦について何も教わっていないと言うことです(F.K.)。

こうした中で若い人に伝える取り組みの紹介がありました。ひとつは、元埼玉公立中学校社会科教員で、現在中央大特任教授の中條克俊（なかじょう・かつとし）さんという人が、中学校教員時代から現在に至るまで戦争と平和を研究テーマにして、地域で聞き取りを通して占領時代史を掘り起こしをすすめる中で、日本の片隅にあった歴史を若い世代にも伝えたいとその活動をしている人の紹介がありました(H.N.)。また、前回にその概要がはなされた学園祭で自分たちの先輩が戦争にどういう関わりを持ったかの展示「戦争と外大生」について、実際の様子の報告がありました。今の大学生が熱心に調べて膨大な資料になったことと、見学者が当初100人くらいと思っていたところ1500人もの人が来て驚かされたことの報告がありました(K.S.)。

二つの報告とも身近なところにあることを掘り起こす形で戦争を知るようにしているのですが、こうしたことをすることで若い人にも興味を持ってもらえると言うことがわかります。実際調べなくとも、例えば、今パレスチナのガサ地区へのイスラエル軍の侵攻し、虐殺まがいのことをしているが、考えてみると、日本が満州に入って言っていく時と基本的には同じことでないか。1936年広田弘毅内閣の帝国議会で「日本人を500万人満州に住まわせ、われわれにとって都合のよい国を作る」と。いますんで居る人達をどうするかなど考えない。それと同じことが起きているのではないかと考えているから、こうしたことを合わせて話すことで理解が深まる史、日本の過去のこともわかるのではないかと意見がありました（M.M.）.

この項目は報道機関のことが念頭にあったかも知れませんが、話題に上ったのは出版物のみでした。上丸洋一著「南京事件と新聞報道」（朝日新聞出版）、倉田富士雄著「自由への代償ファシズムが吹き荒れた時代」（かもがわ出版）、相可文代著「ヒロポンと特攻」（論創社）の紹介がありました（F.K.）。出版だけの紹介になりましたが、近年8月民主主義と言われる時でも、戦争に関する放送や新聞記事が見かけることが少なくなってきているような気がします。

③の加害責任に関係することは、2023年が関東大震災から100年ですが、このとき朝鮮人虐殺があったことをものすごく濃い話で先ほど紹介した中條克俊さんがしてくれました(H.N.)。また、731部隊による人体実験で多くの人を殺しています(M.M)。この話し合いでは少なかったですが、まだまだたくさんあります。しかし、こうした加害の歴史を語ることは加害の事実を語ることは、一部の人から反日的だと攻撃されます。たとえば、戦争の遂行のために、日本で働かされた朝鮮人を弔う群馬の森朝鮮人追悼碑がこうした反対意見によって2024年群馬県によって撤去されました。こうした加害の歴史は隠そうとしたりせずに、若い人にとりわけ伝えなければならないことでもあります。

①②に関してのことには2023年が「新しい戦前」という言葉がはやりましたから、それを私たちがどのような受け止めを持っているか、それから実際に15年戦争に移るには何があるかを追求したいと言うことで設定したのだろうから、まとめます。

これを受けて、ちょうど1週間前に台湾で総統選挙があったので、台湾に行ってきた人の話がありました。台湾はもともと国民党の一党独裁で台湾人が抑圧されていたのですが、そこに民主進歩党という台湾人の政党が出来て、「中国が唱えている一つの中国と言う原則を認めない」と、現状維持を唱え、これをアメリカも支持していることで、中国人民共和国との間で意見相違があるいうような現状の話がありました(K.S.)。K.S.さんは日本が台湾を50年近く植民地統治しておきながら、何もしないというのがこの人には不満のようでしたが、現実は南西諸島にミサイル基地を作って圧力をかけているのでしょうし、一つの中国を認めて日中国交正常化していることもわすれられません。

資料❹　第4回から第6回「むのたけじ反戦塾」のまとめ　（3）

　ただし、こうしたミサイルを設置して緊張状態にあると、何かの切っ掛けで戦争にならならないか不安になるので、②を問うているのでしょう。これについての参加者からの発言はありませんでしたが、むのたけじは「国民の許可を取って始められた戦争は皆無だ」とはなしています。だから、私たちは政府が暴走しないように監視し、そうしたことをしない政権を選挙で選ぶ努力をするのです。
　このように西南諸島で中国などと対峙しているのは自衛隊であり、日米安保条約や日米地位協定に裏付けられた在日米軍です。そこに話が行きました。
　まず、自衛隊に関して言えば、憲法学者の大半が違憲だというが、世論調査をすると圧倒的に合憲という感じです。野党なんかはいろいろ揺れている。いろいろな立場があるだろうけど、どっちかと言えば、自衛隊はいけんだろうと。ただ、災害救助なんかで大活躍しているところを見ると、違憲の存在と簡単に言えるか、そう考えると非常にむずかしい問題かも知れないと生きがする(K.S)。2015年の集団的自衛権の容認後、敵基地攻撃保有論が宣言され、南西諸島にミサイルが配備されている本当に理由を考えた時にもう一度考えねばならない。尖閣諸島に漁船がきた。海警局の警備艇がきたからで、その方針転換が認められるものでもないような気がします。
　沖縄の在日米軍による住人に対する被害などが話題に多く上りますが、立川でも有機化合物PFAS（ピーファス）の地下水汚染が問題になっていますが、基地公害をばらまき続けて来たということも問題です。また、2021年に成立した土地利用規制法によって米軍基地、自衛隊基地、原発の周辺などを注視地域、あるいは特別注視地域に指定して、対象物から1km以内に住んでいる人をプライバシーに関わることを含めて調べられる可能性を含んでいたり、基地機能を阻害するようなことをすると禁止命令が出せることになります。実際立川周辺では、横田基地、陸上自衛隊立川駐屯地、陸上自衛隊東立川駐屯地の3カ所が指定されています(S.A.)。こうした状況変化に対して異議を申していくのが市民運動です。この市民運動について、近ごろ、理想論や抽象論が多いが、自衛隊を何とかするというような具体的にしていかないと、今の軍拡路線は止められない(M.T.)と言う意見がありましたが、具体的に物ごとを追求している動きがあるように思いました。
　立川といえば、今から70年ほど前に1955年旧米軍立川基地拡張するために、周辺の土地を大規模に収容する計画が持ち上がります。これに地元住人が反対する運動を始めた。学生や労働者が支援し、警官隊と衝突を繰り返し、地名にちなんで、「砂川闘争」とよばれる。この闘争は、基地内の民有地返還などを巡る複数の訴訟活動などもし、68年に拡張計画は中止になり、最終的に77年全面返還されます。こうした流れは地元住人の熱意で成し遂げられたものです。
　また、この闘争の中で、57年柵が倒れ、基地内立ち入ったとして学生ら23人が逮捕され、7人が起訴される「砂川事件」が起きた。50年3月、一審東京地裁判決で、「米軍駐留は憲法9条２項に違反する」と判断し、日米安全保障条約に基づく刑事特別法で起訴された7人を無罪とした。この『伊達判決』と呼ばれる一審判決は米軍駐留の正当性を揺るがす判断で、検察側が「跳躍上告」で応じ、田中長官が裁判長を務める最高裁で、を破棄されるが、歴史的判断でありました。その後はこうした判断されることはなく、このかの少し前に砂川事件の国家賠償請求訴訟がありましたが、「判決を言い渡します。原告の請求を棄却する。」という30秒もかからないものでした(S.A.)一連の動きを見ていると、何か恣意的なものを感じます。
　最後に、講演の映像から、人間関係で大事な心得として敬い合う関係。それだけをとらえると、敬って自分は従う、上下関係のとらえ方をして誤解され得可能性があるが、ある一定程度生きてきた人だと、愛とか、助け合意図かと言うより敬うという言葉が素晴らしいと思う。但し、高校生の時点ではわかるかどうかわからない。(M.M)。

資料❺　これまでの「むのたけじ反戦塾」（上映の記録）

2022年3月21日（休）
むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集いプレ・イベント「映像とお話の会」
■参考映像『**むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト次世代への伝言**』
■お話：今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想　佐高信さん
2022年8月21日（日）
- **番組上映『まだ101歳むのたけじ―戦争を殺す日まで』**
- **「いま戦争と改憲の危機に私達は何をどのように闘うか」佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美砂さん**

2022年10月10日（休）
「むのたけじ反戦塾」設立準備会
- **『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映**
- **河邑厚徳 監督のお話**

2022年12月18日（日）
第1回 むのたけじ反戦塾
- 参考映像『**NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」**

2023年3月12日（日）
第2回 むのたけじ反戦塾
- 参考映像　『**100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対**」

2023年7月6日（木）
第3回 むのたけじ反戦塾
- 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリスト むのたけじ**」前半

2023年8月26日（土）
第4回 むのたけじ反戦塾
- 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリストむのたけじ**」後半

2023年11月23日（木･祝）
第5回 むのたけじ反戦塾
- 参考映像**「むのたけじ100歳のつどい『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』**（66分）2015年4月制作

2024年1月20日（土）
第6回 むのたけじ反戦塾
- 参考上映：秋田県立秋田明徳館高等学校PTA主催特別企画**「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと」**（108分）講演：2014年3月10日

2024年３月20日（水･休）
第7回 むのたけじ反戦塾
- 参考上映：**「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと」**（108分）講演：2014年3月10日

2024年6月15日（土）
第8回 むのたけじ反戦塾
- 参考上映：**「むのたけじさんを囲む会」**（中帰連平和記念館2014年6月11日）

2024年8月17日（土）
第９回 むのたけじ反戦塾
- 参考上映：**「2016年憲法有明集会でのむのたけじさん反戦の訴え」ＴＶ番組「まだ101歳 むのたけじ―戦争を殺す日まで」**

2024年11月16日（土）
第10回 むのたけじ反戦塾
- 参考上映：**「むのたけじ緊急講演会『戦争を考える』」戦争とジャーナリズム**

【MEMO】

むのたけじ反戦塾

問合せ先：090−4599−5314 武野
E-Mail:dmuno@jcom.home.ne.jp
〒338−0006　さいたま市中央区八王子4-7-10-201
※参加希望者はご連絡お願いします。